
いくせい、もんすたー

にえる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いくせい、もんすたー

【Nコード】

N7524R

【作者名】

にえる

【あらすじ】

俺は最強だ。

自分で言うのも何なのだがマジで強い。

魔法も使える。

マジ大魔導師。

地形破壊も余裕。

でも、ここはモンスターを育てる世界であって倒す世界じゃない。やってくるよな、ホントに。

いや、マジで。
ホント、ホント。

おれときみ(前書き)

超テキストです。

思いつきです。

更新するかも不明。

それでもいいよって人はゆっくり読んでいってね!!!

おれときみ

俺は最強だ。

自分で言うのも何なのだがマジで強い。

魔法も使える。

マジ大魔導師。

地形破壊も余裕。

ネギ先生？

瞬殺だな、間違いなく。

さすが神様。

テスト前に祈るレベルの信仰心でこんなおまけとかマジありがてえ。

しかも俺がいるのは異世界。

俺が住んでた世界とは違うってことだ。

マジで胸が熱くなるわ。

胸熱。

これで魔王とか軽く捻っておにやによこにモテモテとか目指したけど、残念なことに俺にはこの能力を使うチャンスが無い。

ポケモンの世界でチートスペックな人間がいらないだろう？

つまり、そういうことだ。

異世界は異世界でもモンスターファームの世界なんだよね。

モンスターファームってのはCDからモンスターを再生して、育成して、大会に出して名人を目指すゲームだ。

モンスター同士を戦わせるゲーム。

人間とかお呼びじゃない。

ブリーダーに必要なのはポケモンマスターになれる能力的な才能。

モンスターの気持ち解るとか話せるだったらサイコだね。

俺には無いけど。

もちろん、マジやべえ魔法も使える。

余裕でモンスターも倒せる。

剣とか超得意。

槍だって振り回すよ！！

でもモンスターとの会話は勘弁な。

あ、でもあれが出来る。

ボディランゲージってやつ。

超得意。

拳で語るやつだけど。

なんとも微妙だ。

自分でもわかってる。

このチートは無意味だって。

リアルモンハンしろとでも言われているのだろうか、俺は。

せつかくのモンスターファーム世界なのでブリーダーになった。

I Maとかいう協会で云々だが端折る。

新人ブリーダー。

能力は勇者級だ。

いや、身体能力の話だけど。

いつまでも引つ張って女々しいとは自分でも思ってるけど諦めきれない。

もったいないくらい超やべえチート能力。

無駄だけど。

……いや、ホントに無駄だけど。

新人には助手が付くらしい。

目の前を歩いて行った俺の同期は可愛い少女の助手が付いたらしい。俺の知識が正しければ間違いなくあの娘はコルティア、通称コルト。この同期つてのがあれだ、ポケモンのレッドみたいな無口。

多分、パパス雪山の山頂で半袖姿で挑戦者を待つてるイメージ。相棒は電気ネズミ。

俺はレッドと呼んでる。

あだ名みたいな感じだ。

名前知らないし。

否定もしないから大丈夫だろう、たぶん。

ちよつと横道逸れたけど許せ、マジで。

それぐらい悔しい。

レッドは才能にあふれていた。

俺なんか比じゃないくらい。

ブリーダーになる学校ではトップ。

育成の練習でも教官に褒められてた。

俺は落ちこぼれ、ハイパークラスの。

魔法が無かったら卒業できないレベル。

魔法を何に使ったかって？

ばっか言わせんな恥ずかしいノノ

強いて言えば、俺が本気出すとヤバいよ？ニヤニヤ、みたいな。

思わせぶりの態度で使ったからこそ今の俺が在る。

なんで催眠的な魔法が無いのかと小一時間くらい神を問い詰めたい。
魅惑的な何かならあるのだが。
すぐ効果が消えるから何度もかけ直す必要があって面倒なのだ。

つつかこれが何の魔法かわからん。

今度ムドオンとかいうのを使うことにする。

メギドラオンとかかっこいいから使ったら東の丘が消え去ったのは
記憶に新しい。

犠牲になったのだ。

俺の魔法の練習に、な。

……無意味だけど。

そんな超絶天才のレッドに可愛い助手が付いた。

才能に恵まれ、言葉少ない甘いマスクはマジでイケメン、それに女
運だと……？

羨ましい。

マジで羨ましい。

超羨ましい。

もう俺って死ぬしかないんじゃないかねえの。

みたいなことを女々しくグチグチと考えてたら俺の相棒が登場。

長い茶髪に冷たく見える無表情。

どう見てもリオです、可愛いけど微妙な気分。

登場するハードが違うから。

俺の世界はPS1、貴女はPS2。

バグるから、俺の世界を貴女が登場する世界で再生するとバグるか
ら島に帰れ。

ファンくとガルウでも育成してろよ。
トウゲルの樹木爺とかマジでどうしたし。

確かに俺もバンダナを頭に巻いてるけど、彼とは完全に別物です。
彼はきつとオシャレストाइルのために、俺はチートスペックのせいで勝手に発動する威圧感たつぷりのメンチビームが発生する鋭い眼光を隠すため。
しかも俺はホリイ派なんだよ。

ちよつとテンパったけど話してみてわかったのは同一人物ではない
だろうということ。

名前はリオだけどリオじゃない、みたいな。

テキトーですよ、サーセン。

物静かな少女だし、大丈夫だろ。

きつと、たぶん、おそらく……だといいなあ。

助手を休まれたりしたらモンスターと相性の悪い俺は最悪であるの
でかなり頑張つて欲しい。

おまえなら大丈夫だよ！！

やればできるよ！！

俺が言うんだから間違いないえ！！

みたいな激励もするぜ。

……リオの代わりに来るユリの可愛さは異常。
いや、リオも可愛いよ。

髪下してても、ポニテでもどっちでも大好物です。

さて、モンスターと手に入れて育成と行くか。

モンスターか、テンションマジ下がる。

駄々下がりである。

明日とかにしようぜ？

え、無理？

デスヨネー！。

追伸

勇者召喚に逢えるだろうとドラゴンのプレスを浴びてみたが生ぬる
かった。

焼け死ぬ？

全然そんなことはなかったぜ。

おれときみ（後書き）

ポケモンもテンションが上がらず、ネギまは原作の凄さでやる気出ず。

ああ、俺は何をやっているのだろうか。

おれときみともんすたー(前書き)

くそっ、静まれ俺の両手……っ!!

おれときみともんすたー

今、蘇る我が忌まわしき記憶。
通称、黒歴史。

それってば学校でのモンスターの取り扱い全般なんだけどねー。

モンスターを手に入れる方法は複数あるのだが駆け出し才無し新人ブリーダーの俺にはそんな方法一個も無かつたんだぜ。

新人ブリーダーがモンスターを得るには2種類ある。

市場でテキトーなやつ買う。

市場には時期毎にモンスターが種別で補充されるので好きなのを選ぶのだ。

もう一つは再生する。

神殿行って元から持つてる円盤石で再生する。

円盤石ってなあに？みたいな諸兄のために説明するとモンスターが封印されている石です。

ガチで。

昔うんたらかんたらがあってモンスターは封印されたので儀式で再生するんだと。

円盤石なんてオシャレなITEMなぞ持つておらるので市場に力チ込むところだが、俺の最強スペックが邪魔をする。

あまりの強さにモンスターが怯えて近寄らん。

忠誠は超スパルタ状態で上がっていくのでストレスがマッハで俺の

モンスターは死ぬ。

いきなりの挫折……ッ！！

隣でリオがこの子たち、なぜだかわからないけど心が黒く……みた
いなことを言い出した。

わかってるから、俺には全部わかってるから。

皆まで言わないで！！

リオの中二病臭いセリフがさらに俺の胸をえぐったところでひらめ
いた。

俺に向けて放った神からの天恵。

そうに違いない。

間違いない。

そうであれ、頼むぞカミサマー。

俺は現在、カウレア火山に来ています。

カウレア火山とは熱い山です。

溶岩垂れ流し。

モンスターが冒険してアイテムを拾ってきます。

ゲームではかなりお世話になるのです。

リオも着いてきたけどすぐにへばったので背負ってます。

岩山を駆けるように登る俺に市場のモンスターなんて必要なかつた。
つまるところ日和った軟弱な市場のモンスターよりもワイルドでサ
バイヴァーなノラモンを仲間にすることに決めたのだ。

会話は得意だ。

ただし、拳で語るのみに限る。

今日の目当てはノラモンだ。
ノラモンとはブリーダーが育成に失敗して逃がしたモンスターが凶暴化したものだ。

中には人間には扱えない超強力なモンスターが勝手に徘徊してたりするのでやべえよ、みたいな意味もあるんじゃないかなと思ってる。そんなノラモンの中でもカムイとマグマハートが俺は好きである。ノラモン専用であり、CDから再生できなくて悲しくなったのも思いでの一つ。

そんなモンスターを捕まえに行くことにしたのだ。

カムイの分布は雪山、マグマハートの分布は火山。

流石の俺も装備なしで雪山に突入できないのでこのカウレア火山に来たってわけだ。

ノラモンにもランク分けがあるのだがマグマハートはA。

ランクとは一番下はEでそこから順にD、C、B、A、Sとなる。

つまりめっちゃ強い。

新人ブリーダーのモンスターなぞレベル1000のミュウツーとレベル7のトランセルを彷彿とさせるくらいの差。

ぶっちゃけ一睨みでぶち殺せるレヴェル。

そんなめっちゃ強いモンスターであろうとも、駆け出し才無し新人ブリーダーであろうとも、俺自身は超強いのだ。

ドラゴン狩りの称号は確実である。

いくらか涼しい場所でノラモンを探しながら昼飯。

リオが拾ってきたほのおの羽根を眺める。

この羽はイベントを消化するとヒノトリというモンスターを得るために必要なのだ。

ちなみにフェニックス火山が初出なのだが、手に入らなかつたらカ

ウレア火山でも拾える。

ヒノトリは手塚先生に遠慮したのではないだろうかというくらいのスベックを持ってるので大会荒らしとかに便利だった気がする。燃えるように輝く羽は見事なまでに美しく、キテレツな出会いを俺に齎すだろう……なんてね

リオに引つ張られて見た先は青白い炎が飛んできている様だった。冗談だったのだ。
本気じゃなかったのだ。

だからね、今飛んできている大型の鳥は巢に帰るべきそうすべき。そっちのほうが安全なのは確定的に明らか。

俺の爽やかな説得は届かず神々しく降り立ったのはS級のノラモン、フェニックスだった。

出会い頭にビームを撃ってきたこいつはどうやら俺のムドオンを喰らいたいらしい。

ふはははははははははー、みたいな高笑いとともに黒い魔法陣が展開して相手を包み……無傷で俺にビームを撃ってきた。
あるえー？なんていいながらムドオン連射。

効いてないようだ。

たぶん、地面タイプの魔法なんだね。

フェニックスってどうみても飛行タイプだし、しかたない。

リオを肩に担いで逃げに徹する。

凄い、憎悪が、まさか……こんな……、とかリオさんの中二発言を華麗にスルー！。

ビームつばいの余波でもダメージを受けると思うのでリオを庇いながら戦うことにする。

今の俺はめだか箱みたく昇りながら戦ってるぜ。
その後落下しながら戦ってる。

すごい、落ちながら戦ってる……、とかリオさんが呟いてるけど結構余裕あるね、君。

リオを途中でさりげなく岩陰に隠して戦いを続行。

まさかリアルモンスターハンターするとは思わなかった。

経験値バリバリのフェニックスは必死に食らいつき、経験が足りない俺は決め手に欠けている。

そこで必殺技を繰り出すことにする。

人間の限界を超えてこそ俺だ！！と言わんばかりの本気北斗有情破
顔拳< (・・・) > テーレッターである。

ビームとか超出る。

くたばれってことだ。

リアルモンスターハンターして得た賞金は3000G。

確かに高額なんだが、ブリーダーからしたら釈然としない。

金銭感覚ぶっ飛んでる人種だが、やはり解せぬ……。

修行地の斡旋をしている人を小ばかにしたような糞みたいな顔をしたオッサンの言葉を無視して去る。

倒れたフェニックスは右肩に、暑さでやられたリオを左肩に担ぎながら帰宅。

青白く燃えるフェニックスを眺めながらこれでいいかと満足。

マグマハートは次の機会にでも取っておくことにしよう。

俺は素晴らしい相棒とともに名人への一步を踏み出そうとしているのかもしれない。

ごめん、ちょっとカツコつけてみたかっただけだし。
意味なんてないし。

追伸

ドラゴンが今日も俺を焼きに来たが、余熱で風呂を温めるのに便利
なくらいだった。
まあ、大会でもプラントを焼き切れないし、威力はそんなでもない
のかもね。

誰か異世界に勇者として召喚してくれ。
マジで。

切実な願いなのだよ。

おれときみともんすたー（後書き）

モンスターファームって20代ほいほいだと思う。

おれとリオともんすたー（前書き）

ヴァージアハピとすえきすえぞー先生にはお世話になりました。

資金的な意味で。

おれとリオともんすたー

3月の桜が舞い散るこの季節、僕はブリーダーとして羽ばたきます。みたいな感じで育成しています。

俺のファームはここ、何も無い平地である。

それもそのはず、ここは俺がメギドラオンで吹き飛ばした丘なのだ。メギドラオンの丘とカッコつけて呼んではいるが、吹き飛ばしたから丘が無い。

草木が無い。

まあ、あるのは澄み渡るような青空くらいかな

レッドは小屋付きファームなのに俺は何もなしとかマジゆるせねえ。まあ、3000Gとか馬鹿げた大金が支給されてるので我慢してる。

ひゃあ、ブリーダー様々だぜえ!!

貨幣にはB、S、Gの三つがあるわけだ。

Bはブロンズ、一般人の生活にはこいつとSのシルバーが使われる。

1Bは1円、1Sは100円くらいに思ってくれればいいよ。

Gはゴールド。

輝かしき金。

1Gで1万円。

桁が馬鹿になっている気がする。

ブリーダー的には1000G切ったら金欠だとかなんとか。

ある意味では特権階級みたいなモノなので貴族ぶった馬鹿がいるのはこのGのせいだと思ってる。
賞金とか一番低くても500Gだし。

食い物とかもバカっぽい値段になる。

肉もどき300G。

まあ、ひと月分だし許してやるよ。

モンスターのガタイもでかいしな。

大会賞品が狂ってやがる。

プラチナの塊みたいなのが出るのだが相場にもよるけど5000Gはくだらないとか。

マジやべえ。

俺ってば勝ち組かもしれない。

そんな勝ち組の俺は街からいろいろ運んできたところだ。
住居はある。

卒業するまえに建てておいた、この大工はいい仕事をする。
べた褒めしたのだがそうでもない、と一言で切られた。

大工さん、謙虚ですね。

家具から何から運んできたので整理に入る。

フェニックスがはしゃいで暴れるので気絶させたが、地形が変わった気がする。

とりあえず、毎晩UFOが現れる場所だけ整地したので安心して眺めることが出来る。

目覚めたフェニックスが炎とともにじゃれてきたので相手をする。選ばれた者のドミナント、お望みとあらば見せてやろう！なんてリオに声をかけてからノリノリで遊ぶ。

これが、私のドミナントだ、よく見ておくんだな！なんてテンションが最高潮に上がったときに叫んでいたらしい。
恥ずかしくて死にたい。

モンスターを協会に登録する必要があったのを忘れていたの。ペット買うときも許可証があったりするだろ、あれと同じだ。

合体させたりした場合も手続きが必要になるのだが、今は必要ないので省略するしようか。

すでにリオが手続きをしていたらしく協会で話をして終わりらしい。

……フェニックスの名前がドミナントになっている。

まあ、フェニックスのままじゃダメだもんな。賞金まで掛かってるし、ポジティブに行こう。

写真とか写ってるけど他モンの空似とでも言っておけばいけるいける。

街まで遠いのだが、あら不思議。

ドミナントと遊んでいるとすぐに到着。
リオは担がれながら凄惨、飛びながら戦ってる……とか呟いている
けど君はそれを言うのが癖なのかね。

俺はヒノトリを育成する権利を持っていなかったがドミナントを管
理する権利を得た。

協会に行ったらガチムチなモンスターに囲まれてドミナントが連れ
て行かれそうになったのでOHANASHIに興じることにしたが、
やはり勇者クラスの俺に敵うモンスターはいなかった。

どうやら俺のアギはドラゴン種のブレスを上回っているようだ。
これはアギダインではない、アギだ、とか出来るけどまずアギ系を
使う敵がないので脅威は伝わらないだろう。

どうしても俺が育成したいってバンダナを上に乗らさずとかしながら
頼み込めば不思議なことにお偉いさんはみんな頷いた。
話し合いってのは大事だよな。

武力行使は最後の手段だって俺の胸に響いたわ。

結局、育成ではなくて管理の権利だけど大して変わらんだろう。
気分良く俺はメギドラオンの丘へと帰って行ったのだった。

でも、俺が通るたびに店が閉じるのは勘弁してくれませんかね。

リオが大変な思いをするのですよ。

追伸

ドラゴンのブレスで台風ごっこをやった。

傘が一瞬で融けて遊びにならなかった。

ドミナントのビームが追撃できたので遊んであげた。

とっても楽しかった。

宇宙人に勇者召喚とか無いのかなって飯を一緒に食べながら相談した。

優しい宇宙人だった。

おれとリオともんすたー（後書き）

個人的にはヘンガー種がジャステイス。

おれとリオとドミナント（前書き）

ピクシー種を下から舐めるように見るのは俺だけではないはず。

おれとリオとドミナント

宅配サービスマジ便利。

リオの手を煩わせることなく必要な荷物を頼むことが出来る。

宅配サービスはロードランナーが来てくれる快適なサービスだ。

欠点は震えてファームの中まで来てくれないことカナー

ドミナントを気絶させて、休憩をいれる。

茶を啜っていると今週、町で公式戦が行われるのだとか。

リオ曰く

ユーのドミナントはドミナントだから出ちゃいなヨってことらしい。
つまりとりあえず負けてもいいから挑戦してくればいいよってことか。

なるほど、わからん。

負ける要素が相手のモンスターを虐殺する以外に存在しないのに負けていいとありえん（笑）

協会から出来るだけ出さないようにとか言われてた気がするけど金稼ぎには代えられない。

しょうがないよね、これってブリーダーの定めだから。

スタート時の3000G、諸経費で消えていったがノラモン討伐として3000G入ったしどう考えても豪遊できるがエサ代とかあるから頑張る。

超頑張る。

ドミナントと遊んだり、リオと茶を飲んだりしながら過ごして街へ繰り出す。

いいぜ、お前らが店を閉めるって言うなら俺のドミナントがその幻想をぶち壊す！！なんて悪ノリしながら街を練り歩く。

目を合わせた瞬間逸らされたりするけど、絶対に逆効果だろ。絡みたくなくなる。

俺がメンチビーム、ドミナントが火力を上げて輝く。

ほづら、明るくなつたろう。

リオさんに怒られたけど問題ない。

正座するドミナントがすごく、シユールです。

公式戦の会場に連れて行くと人だかりが出来ていたが俺たちが現れると散っていく。

まるでモーゼの十戒？とかいうやつみたいな感じである。

なんて凶悪な……とか、貫録がY A B E E E E Eとか、今日のSランクは見ごたえがあるぜ、とか、話し声が聞こえる。

悪いがコイツはEだ。

いや、マジでEランク。

俺のブリーダーランクは愚か、モンスターランクすら上げてくれな

かったから仕方ない。
犠牲になってもらうしかないのだ。

禍々しいドラゴンを連れたオッサンに話かけられた。
新入りか？いいモンスターだ、今日はいい試合云々。

上機嫌で去って行ったけどあのオッサンもEなのだろうか。
さすがモンスターファーム2である。

Eから地獄だぜ。

結果から言えば大会に優勝した。

産まれて間もないひよつこどもにドミナントの相手は重すぎた。

棄権すればいいものを特攻してくるのでひっかいて血まみれにする。

ほとんど病院直葬……直送である。

棄権した奴が準優勝していた。

彼は大物になる、とか思わせぶりに呟いてリオを驚かせる。

正直、俺には全くわからん。

才能はあると思います、俺より。

他のブリーダーが憎悪の視線が向けられ、ドミノントの猛る炎がほかの出場者のモンスターを2、3体ほど焼いたところで黒いドラゴンに防がれた。

Sの試合にも出ていたドラゴンで名前は確か……タナトス。

さっきのオッサンのドラゴン。

ドラゴン×ジョーカーのディアボロス種。

寿命が極端に短いのだがSまで育てるとかオッサンマジやべえよ。

「血気盛んだな、若いの 尻を貸そう」

……コイツの名前はゲイヴンで決定だ。

白けたし、帰ることにする。

呆けているリオを担いでドミノントに飛び乗る。

「落ち着いたかね、君は良い腕だがまだまだ若いな …… Sで待っているぞ」

ブリーダーとしては腕がいい、空気も読める。

素晴らしいオッサンであるがゲイヴン。

残念ながらゲイヴン。

振り返らずにファームへと帰った。

レッドから祝いの手紙が届いたのは次の週になってからだった。
……手紙の名前にレッドって書くのは気に入ってるってことだよな。
なんてことを考えながらドミナントと遊ぶことにする。
すごい、食べながら戦ってる……とか言ってるリオさんは無視する
ことにした。

追伸

ドラゴンが弱っていたので直すことにした。
ドライバー一本で直す俺は一流のメカニスト。
こんなところもチートなのである。
最後にディアラハンをかければ完治だ。

今日も召喚されなかった。
魔法陣でも書いてみようかな。

おれとリオとドミナント（後書き）

1のときは胸が成長するのをわくわくしながら待っていたものだ。

2はある程度大きくなっているので微妙だが、かわ いいよね。

おれとリオとドミナント、ときどきもんすたー（前書き）

ロボットに惹かれるのは男だからなのだろうか。

今回の内容との関連性はありません

おれとリオとドミナント、ときどきもんすたー

モンスターファーム5。

異世界に移動してきた俺でも忘れられない珍作。

主人公がサーカス団に所属しているのでモンスターをサーカスのテントで育てるのだ。

もちろんモンスターが芸をする。

いや、もうこれモンスターファームじゃないだろう。

なんて馬鹿なことを考えながらリオと茶を啜る。

近頃モンスターを使ったサーカスが話題になっているのだとか。

配達サービスのロードランナーに乗って街へと度々出かけるリオの琴線に触れたらしい。

リオが表情豊かで俺は嬉しいよ。

癒される。

ホリイ派だけど。

一度は見てみたいよな、と相槌を打ちながら協会から届いた手紙を焼く。

ケシ屑になったものの俺の気持ちは晴れない。

内容は初段認定と謹慎だった。

初段になったのはいいのだが、謹慎とかマジやっちゃったし。

暴行事件はブリーダーとしての品性がとか読む気が失せた。

無期限の大会への出場停止とかマジキチ。

つつか出場停止にするなら初段に認定すんな。

このままでは俺は干されるかもしれないので他の道へ直走することにした。

ブリーダー。

モンスターを調教する資格を持っているモノの総称。

協会が指定する専門の学校を卒業した者が持つ証。

ブリーダーと括っても育成の方向は多岐に渡る。

最も人気が高く、ブリーダー人口が多いバトル（コンバットとも呼ばれる）。

ブリーダーのほとんどがバトル専用育成し、俺やレッド、ゲイブンのオッサンなどが含まれる。

他には仕事（先ほどの話にも出てきたサーカスのモンスターも同じであるのだが）に特化させて特殊な職に就かせるブリーダーの総称をメーカーと呼ぶ。

メーカーの中でも特殊な職。

レースの大会に賞金を稼ぎに行くことにした。

金欠でモンスターを手放すなどド3流にすることなのだ。

見せてあげよう、ラピユタの雷を！！的なことはやるけど。

レースはゴールへ最も速くたどり着いたものが勝利となる。

コースは陸海空の3種類。

モンスターの背に乗り、競い合うスポーツ。

モンスター同士の苛烈な戦いに一歩劣るものの人気は高く、協会に許可を取っている賭けが更に人気を呼んでいる。

そんなレースの空の部門に混ざるのは難しいことではない。ブリーダーならば参加できるうえに初級認定証を見せれば鴨が葱背負ってやってきたようなものだ。最下級のEであろうと公式戦で優勝するほどの優良モンスターである。

噛ませ犬にはもってこいだ。

そんな俺に人気は無く、倍率がヤバいことになっている。

この前の事件によって更に人気が下がり、倍プッシュ。

そしてリオが俺に1000Gほど賭ける。

あとは勝つだけだ。

ルールは確認済みである。

妨害ありがこの競技の魅力でもあるのだから、最低限度のルールを守っていればドミナントに死角はない。

コースはここらの海を飛んで遠くに見える小島を旋回して戻ってくる簡単なもの。

出場しているのはレースの中でも最低ランクだが賭け金が目当てなので興味は無い。

参加者はドラゴンに乗っていたり、ヒノトリに乗っていたりする。

空の部門はコンバットの空きに参加するブリーダーが多い。

メーカーの場合はもっと上の階級に参加している。

アーケロが火を吹いてレース開始の合図。
スタート直後に飛び出したモンスターにファイアリバー。
そのまま後方に牽制しつつ悠々と飛行し、優勝。
ブーイングを浴びながらのモビウスターン。
俺の機動は変態だぜと内心で喜ぶ。
が、実にキモい事に気づき死にたくなった。

そのうちリアルチャッキー人形が送られてくるのでは、と思うほどの不人気っぷり。

ゲーム内のチャッキー人形はファンから送られてくるが、俺は呪われそうだよ、ホント。

コンバットでは残虐、レースでは外道。
どう見ても悪役です。

ドミナントの青白い炎が拍車をかけているとか。
カッコいいと思うのだが、これがわからないとかモグリだな。

謹慎が解除されたのでウハウハである。
均衡を保っていたレースを荒らすのはぐらしいが知らんがな。
レースは3か月の出場停止。

抗議が凄いから自重しろと釘を刺されてしまった。

今は6月の半ばを過ぎたころ。

どのランクのモンスターでも参加することの出来るFランクの大会が終わってしまった。

今回の大会は延命アイテムである白銀モモが賞品だったので参加しておきたかった。

命は金にも代えがたいのだ。

と思ったらシルバー杯だった。

シルバー杯というのは6歳3か月を超えているモンスターが参加できる大会である。

そういえばドミナントって何歳なのだろうか。

ノラモンだし、でかいしすでに成長しきっている気がしないでもないのだが。

ヒノトリは死に際に飛び去るモンスターである。

もしかしたらドミナントは死に際から再び蘇り強力な能力を得た、という設定があるかもしれない。

清麿のアンサーカーみたいな感じで。

日差しが強くなってきた。

夏も近い。

予定としては月末に公式戦で勝ち抜き、来月にある選抜戦で優勝しておきたいところである。
ホリイ派として。

追伸

修理したドラゴンが力強く羽ばたく姿を見ることが出来てリオも喜んでいた。

最近のリオは表情が柔らかくなって笑顔も時折見せることがある。美人は笑うべきだと思う、ホントに。

プレスで小火が起きたのでわからんのか？イレギュラーなんだよ、やりすぎたんだおまえはな！とドラゴンのお仕置きも兼ねた追いかけっこ。

残像出しながらの追撃はかなり有効だった。

勇者召喚のように他力本願では無く自力で行くのはどうだろうかという結論が出た。

魔法を適当に放てば転移とかがあるかもしれないと期待するのは早計なのだろうか。

おれとリオとドミナント、ときどきもんすたー（後書き）

ヘンガールの光学兵器がクリティカルしたときはテンションMAX。

あの光がかっこいいですの。

おれとリオとドミニカント、ときどきイレギュラー（前書き）

ピクシー種のエロさは異常である。

ミントは俺の嫁。

おれとリオとドミナント、ときどきイレギュラー

有史以来、人類は様々なモンスターを手に入れ、文明はその力に導かれて歩んできた。

では、ドミナントほどのモンスターが導く文明の行き先は何だ？

温泉だよ。全てを癒すことできる温泉だ。

俺の意思が、リオの無意識が、週末を望んでいるのだ！

マジ温泉入りてえつてことで掘った。

俺は掘った。

アナー・ホッターだ。

ゲームには温泉イベントがあった。

きつと温泉はある。

なぜなら俺のチート能力が囁いているからだ。

温泉の気配を感じとるほどのチート持ちが魔王のいない世界で穴を掘っているよ！！

魔王に脅かされている世界は逸早く俺を召喚すべき。

今なら聖剣・魔剣に取り付いている幼女精霊なしで討伐します。

……なんてね

後片付けてるのはサイコ に面倒だ。

掘りまくってメギドラオンの丘が穴だらけ。

温泉が噴き出して水浸し。

埋めるには少しばかり骨が折れる。

そんな俺はダンボール戦士へとジョブチェンジ。

リオに見つかからないように逃げ出すのが最優先事項。

ドミナント？

ははっ、困になってくれたよ。

音を置き去りにする正拳突き便利すぎてビビったとだけ言っておく。
う。

このまま気付かれずに進めば……！？

なぜ、リオがここに……。

え、ロードランナーと街に行くつもりだった？
糞が、最悪だぜ。ついてねえ！ついてねえよ！
リオから、光が逆流する……！

起きたら日が落ちていたがそこから埋め立て作業、温泉を完成させるという暴挙に……っ！！

マハラギダインで水分を飛ばしてゴッドハンドで整地。
街で買ってきた材料で温泉の設備を整える。
リオさん、アンタ鬼やでホンマ。

PS1のモンスターファームは一体育成だが流石に一体だと効率が悪いつつので複数体を同時に育成するブリーダーもいる。
新人ブリーダーには同時育成なんてするやついないが才無し新人ブリーダーの俺は格が違った。

ヒノトリ種に次いでドラゴンまでも育成することに踏み切ったのだ。
というかりオが勝手に登録したのでノラモンとして暴れられたら監督責任で俺にまで迷惑が掛かるから手元に置いておくぜってことだ。
名前はイレギュラー。

……まさかの俺にとってのイレギュラーだった。
協会も騙して悪いが、とかしないよな。

空気を読んで外で待つことにする。

入口は人が多いので裏口から行ける寂しい広場だ。空を眺めると2体のモンスターがデッドヒート。空の部門のレースだろう。

あれはメーカーのモンスターだな、一目でわかるほどにこの前のレースのモンスターとは練度が違う。

より速く、効率よく飛ぶための育成。

同期の中にも空を目指していたやつがいた。

誰よりも自由で、そのくせ重力の鎖に縛られて。

それでも空を諦めず、憧れは誰よりも高く……なんてね。

ピクシーは今日も飛んでいるだろう。

あいつは空が好きだからな。

俺はサイファーよりもメビウスのほうが好きなんだが。

でもあいつはどう考えてもピクシーっぽい。

よう、相棒。とか言うし。

あだ名通りで行くと裏切られるけどそうならないように願っておこう。

会場から歓声が聞こえたので試合が終わったのだろう。
係員もおどおどしながら知らせに来たのでドミナントに飛び乗って
空から様子見。

俺のチートアイズは赤いアーチャーをも超える視力、かどうかはわ
からんがとにかく目がいいのだ。

歓声に包まれているのは同期のレッド。

独特のキャップは俺がプレゼントしたものだ。

レッドなら帽子は必須アイテムだからな。

たったの3か月あまりで公式戦を優勝とは、さすがだと思う。

純正のモッチーだし、ふつうは難しいと思う。

まあ、欲を言えば電気ネズミっぽいのを育てて欲しかった。

電気ネズミっぽいモンスターってなんだろうか。

……サクラモッチって名前は安直すぎると思う。

ドミナントで会場へ。

俺が登場しただけで水を打ったような沈黙。

3、4か月ほどのリーダー歴でここまで悪役になった奴はきつと
いない。

というか俺がDランクだったことに気付いてないやつもいるはず。

レッドにここまで教科書に載っているとカッコつけの言葉をかけ
てから試合に臨む。

Dを超えるなら自分で考えろって感じかなー
チートモンスターを使ってる俺が言えたことなんて無いけど、俺の
格言は「心に柵を作れ」だから問題無かった。
結局、鉤爪で引っ掻いて終わりだ。
怪我が嫌なら棄権すべきそうすべき。

優勝賞金を貰って爽やかに帰宅。

モノが投げ込まれる会場でトロフィーの授与とか俺ですら嬉しくな
いから。

公式戦は賞金が微妙で俺は悲しいよ。

ドミナントにオイリーオイルを与えながらリオが街で買ってきたオ
イルでイレギュラーを磨く。

モンスターファームにおいてオイリーオイルは最強のアイテムの一

角である。

とりあえず疲れが取れる、と考えてくれればおk。

イレギュラーの機械部分をバラしてオーバーホール。

このドラゴンはテクノドラゴンという種でドラゴンをメインにヘンガーを合体させたモンスターだ。

結構貴重なのだが、ノラモン化していた。

上位のブリーダーが育て方を間違えたと予想。

ドラゴン種ってピーキーだしね。

7月の頭に熱烈なファンレターが少数と膨大な数の抗議文が……！！

協会から届いた段位上昇の手紙は斜め読み。

抗議文は焼いて捨てる。

世間の声に耳を貸すべきだよね、とファンレターを呼んで返事を書く。

拾った円盤石もついでに送る。

俺はサービス精神豊富なのだ。

円盤石ってのは前述したとおりモンスターを再生することができるのだが、円盤石の欠片というアイテムも存在する。

欠片の場合は合体時に使うと補正がかかる、みたいな感じだったはず。

こんな感じで今日も過ぎていくのだ。

あ、まだドミナントとイレギュラーと遊んでなかったわ。

追伸

転移系の魔法は無かった。

テンション下がるわ。

めっちゃ下がるわぁ。

ハマ系とムド系を使ったらノラモンが即死した。

今度から使わないようにする。

ドミナントはヒノトリだから大丈夫とかそんなことがあったんだろ
うよ、たぶん。

宇宙人に種を貰った。

これはどう見てもモックの種なのだが俺には全く必要ないものだ。
レッドに送っておこう。

あ？

俺が説明口調なのはなぜかって？

リオにも説明してるからだよ。

成績が優秀でも助手は助手。

俺から教えることも多いのだよ。

まあ、俺も助手してた時期があったから懐かしいって気持ちもあるけどね。

俺が手伝つとモンスターがいなくなってブリーダーに慰められたのは黒歴史。

超忘れたい。

まあ、公こうさんの人柄を知れたのはいい経験だと思う。

もちろん公こうさんもあだ名だ！！！！

ハムさんでも可。

おれとリオとドミナント、ときどきイレギュラー（後書き）

ヘンガーを魔改造してフィンファンネルとか出せないかな。

エンドブリンガー、ダークヘンガー、ヒューイ、オメガレックス。

なぜあも俺の心をくすぐるのだろうか。

プロトメサイアーマジでどこいった。

わたしとあなた（前書き）

ドミナント

先天的に戦闘的性に優れた者という意味があり、過去の伝説的なレイヴンは皆ドミナントであるとかないとか
そこら辺の事実は知らんがな）・・・（

ゴミナント

腕に自信が無い物が自称する称号

ゆっくり動画の話だが、ネタでふはははははー、ドミナントの私に
くなんて言うゆっくりがすぐやられるので近頃は「ドミナント」=瞬殺
の図式を連想してしまう。

ドミナントエ……。

わたしとあなた

私が気付いたときにはすでに噂は学校中に広がっていた。

友人のコルトから聞かなければ私が噂を知るのもっと遅くなっていたに違いなかった。

それくらい私には友人が少なかった。

コルトは明るい性格で友達も多い娘だ。

少し前までなぜ私と仲が良いのかと疑問に思ったほどだった。

少しばかり背が小さいことを気にしているがブリーダーを目指して勉強に励んでいる姿は好感が持てた。

「ねえ、聞いてる？」

「え？ きゃっ!!」

突然、コルトが目の前まで迫ってきていたので驚いてしまった。

考え込んで気付かないんだもん、とくすくすと笑いながら声をかけるコルトに少し睨んでから何の話だったか聞き直す。

「……ホントに聴いてなかったんだね」

「う……」

話を無視していた私にコルトが拗ねた口調で呟く。

睨んだことの罪悪感もあっていたたまれずに謝る私にまたもくすくすと笑いながらコルトは冗談だと言った。

「でも考えすぎる癖は直した方がいいと思うよ 再来年の研修で新

人ブリーダーの人の助手をするでしょ？ ちゃんと話を聞かないとね」

コルトの正論に対して私が出来たのは普段の小さい声を殊更小さくして呟くように気を付けます、と言うことだけだった。

「なんてね」

「え？」

「リオをイジるのはおしまい 反応が面白いからからかっただけだよ？ ごめんね」

笑顔でそうのたまうコルトにさきほどの事を忘れて怒ろうとしたのだが、ニコニコと笑いながら謝るコルトに言いたいことを飲み込んだ。

「それで、何の話だっけ またレディア先輩のこと？ もう100回以上は聞いたんだけどな」

「ち、違うよ まだ100回も先輩の話なんてしてないんだからね！！」

「まだってことはそのうちするつもりだったんだ……」

「し、しないって！！ 今ガッコウで噂になっていることだってば

……」

レディア先輩とは私たちの一つ上の先輩だ。

成績優秀で容姿端麗、まるで絵に描いたような万能の人。

人気が高く、憧れている生徒は2桁じゃ足りないのだとか、なんとか。

コルトも例に漏れず、先輩のファンであったが私にはよくわからなかった。

その憧れの先輩を引き合いに出してコルトをからかう。

先ほどの意趣返しとしては趣味が悪いとは自分でも思うが少なからず溜飲が下がったようだった。

「あはは、冗談だよ で、噂って？」

もう、と頬を膨らませていたコルトだったがその噂を私に話す方が重大だったのかすぐに口を開いた。

「バンダナの悪魔がまたやらかしたらしいよ 謹慎だつてさ」

「バンダナノアクマ？」

バンダナノアクマとはなんだろうか。

私が知らないモンスターかアイテムか、判断が付かないところだ。首を少し傾げながら聞き返す。

「リオ……まさかバンダナの悪魔を知らないの？」

驚いた、とばかりに目を大きく開きながら聞いてくるコルト。うん、と何処か気恥ずかしく思いながらも正直に頷いておく。

まさかこの学校にあの悪魔を知らない生徒がいたなんて……と呟いて俯いたのだが、2、3秒ほどで気を取り直したのか一度頷いた。

「バンダナの悪魔 彼はとても我が校では有名です」

真剣な表情で話し始めたコルトは少し背伸びをしているようで可愛かったのだが、本人に伝えるとムクれて話が進まないので口を閉じたまま聞く。

清聴、というまさに聴くものの姿を体現しているのではないかと思う程に姿勢を正す。

「彼は我々の一年先輩であり、様々な事件を引き起こしました」

「そして、謹慎」

言葉とともに小さな手を広げて指を交差させてバツを作る。

「事件を起こしては、謹慎 事件と謹慎の交差 なぜ退学にならないのかと思うくらいの問題児 むしろ退学にすべきです 私はあの視線が嫌いなのです そもそも……」

うんうんと頷きながら独り言に走るコルトを横目に初めて聞いた噂を解釈していく。

謹慎するということはきつと悪い事をしたのだろう。

そもそもこの学校に謹慎なんて制度があったのか。

むしろこんな学校で謹慎するなんて何をすればいいのだろうか。

というかコルトが嫌うなんて一体どんな怖い人なのだろう。

最終的にレディア先輩とお昼ご飯を食べるシミュレートをし始めたコルトに疑問をぶつける。

レディア先輩に対してのみ起こるこの態度は、少し……いや、かなりやめて欲しい。

「事件ってどんなことを起こしたの？」

「私のカララギマンゴーと先輩の……はっ、え、あ、うん？」

「聞いてた？」

「……ごめんね ええと、なんだっけ？」

「コルトもその癖を直すべきだね」

「……返す言葉もありません」

先ほど言われたことをコルトに皮肉として言い返す。

小さいコルトが縮こまって居た堪れなそうにする姿は私の心をくすぐる。

妹に対する気持ちに近いのかもしれないが生憎私には姉妹がいないのだ。

心地いいので時々やっているこの癖も意地悪いので辞めた方がいいのかもしれないが、文字通りクセになる。

「で、バンダナの悪魔って先輩はどんな事件を起こしたの？」

「知らない」

「え？」

「知らないけど見たことはあるの あの時困気は悪魔そのもので何

をするかわからないくらい怖かった　リオも危ないから近寄らない方がいいよ」

雰囲気怖かっただけでコルトが嫌いになるのだろうか。

それとも言葉通り、悪魔のような人間なのだろうか。

でも悪魔なんて見たことがない私には想像がつかなかった。

「鋭い目をバンダナで隠しているのはやましい事がある証拠だよ、きつと　あの凶暴なドラゴンや性格の悪いスエゾーを睨んだだけで屈服させたとか　まるで悪魔の所業ね」

「……他には？」

「あとね、レディア先輩とかシルフィーユ先輩と仲がいいらしいんだけどね　ああ、悪魔に憑りつかれた先輩をどうやって救えばいいのかな……」

今、悪魔と呼ばれている一番の理由を知った気がしたのだけれど私の気のせいなのだろうか。

まあ、それでも謹慎を起こしているってことは問題があったからだと考えるのが普通なのだろうけど。

バンダナの悪魔の話聞いてからちょうど一週間がたったある日の夜。

私はテスト勉強で鬱屈していた気分を晴らそうと寮を抜け出した。門限は疾うの昔に過ぎていたけれども構わなかった。

学校の中心、その広場にある時計台に背を付けて座り込む。

まだ冷え込むには早い季節だ。

呆けながら夜空が綺麗だな、と雲一つない空を眺めていた。

「よう、少女　もう門限は過ぎてると思ったのだが、俺の勘違いだったかな」

「ふひゃあ！！」

誰もいないと思っていた場所で声を聞くななんて思わなかったのだから奇声を発してしまったが突然聞こえてきたら誰だってそうなると思う。きよろきよろと周りを見渡しても人影はなく、探していない時計台のてっぺんに目を凝らす。

そこには一人の男が空を眺めていた。

頭に過つたのはバンダナの悪魔の話。

奇妙なことにコルトの話に聞いた通りバンダナを頭に巻いていたがそれ以外は普通の青年だった。

これが噂になるほどの悪魔なのだろうか。

ずっと目を眺めていた青年はこちらを見ることは無かったが私の無遠慮な視線に気づいたのだろうか。

口元を歪ませながら聞いてきた。

歪ませた、と表現したが不快になるようなモノではなく、苦笑いをしていただろう。

が、バンダナで目元が隠れているために歪んでいるように見えた。

「……何か気になることでもあるのか？」

「いえ、別に……先輩も門限を過ぎてるように思いますが」

「ああ、なるほど 確かに俺もだな」

くくく、なんて愉快そうに笑っている先輩は噂に聞く悪魔の要素など一欠けらも感じさせなかった。

ただ、バンダナのせいで不審者には見えるかもしれないが。

「ところで、俺が先輩だとなんでわかったんだ？」

「先輩は……有名ですから」

確かに、と納得したのか先輩は口を閉じた。

視線をこちらに向けることは無かったし、会話はここで終わりなのだろうと自然に思った。

「女の子が一人で出歩くと襲われるかもしれないが大丈夫か」

幾らかの時間が経った頃、先輩が不意に口を開いて発した言葉がそれだった。

悪魔と呼ばれる男がなんて平凡なのだろうか。思わず笑いがこぼれてしまった。

「あはは、先輩面白いですね」

「面白かったのか……？」

視線は空に固定したままなのだが先輩は私の言葉が理解できなかったのか首を傾げて。

その行動すらもツボに入ってしまった、平静に戻るまで時間がかかったのだが先輩が悪い。悪いのだとしておこう。

「ふう、で？」

「何が で なんだ？」

「だから、先輩は私を襲うんですかってことですよ」

何を馬鹿な、と先輩言った。

「人畜無害であると、俺は思っている」

「……事件起こしたり、謹慎したりって話を聞きましたけど」

「なら、理解が足りないんだな」

「事情は知りませんが、理解するには難しかったのでは？」

くくく、と先輩は笑っていた。

口元を歪めて、悪役の様に。

まさにその姿は悪魔だと思しながら、頭の片隅ではよっぽど人間らしい悪魔なのだとも考えていた。

「ならば、理解が来い 俺の元に追いつくべきだ」

本当にこの人はあくま、なのだろうか……？

まるで理解されないことに駄々を捏ねて、自分本位でモノを考える子供のよう。

それとも考えすぎて周りからおいて行かれた大人のように。

もしかしたら、この人は私にはわからない何かを知っているのかもしれない。

でも

「……先輩」

「なんだ」

「ちょっとかわいいですね」

「何故だし」

少しだけ拗ねたような表情をするこの人と話せて良かったと思った。噂に踊らされていたらきつと自分では会話する機会も無かっただろう。

ちよつとだけ良かったと、人と話せて良かったとホントに思えた。

……ホントにちよつとだけ。

「先輩は何を見てるんですか」

「空と月」

「面白いんですか」

「そうだな まあ、普通だ」

「なら、なぜ」

「いつもだったら妖精が空を飛んでるんだが今日も見れないみたいだな」

「妖精ってピクシーですか？」

「知ってるのか、先輩」

「……男の子なんですネ、先輩」

「……何故だし」

「だって、ねえ……？」

「何がねえ……？なのか問い詰めたいんだが」

「いたいけ幼気な後輩をいじめるんですか 悪魔め」

「悪魔でいいよ 悪魔らしいやり方で話を聞くから」

「……冗談ですよ」

「ならば良しとしてやるう」

「命の危険を感じたんですけど」

「悪魔と話して無事でいられるわけがなからう、若人」

にやりと笑う先輩はやはり悪魔なのかもしれない。

ああああああああ

いきなり僚機に 消えなさい、イレギュラー！！ ってされたとき
くらいショック

死にたくなった

シュークリームが冷蔵庫から無くなってたときくらいショックを受
けた

テンションの関係上、更新が不明になります

国境が俺達にくれたものを考えながらお待ちください

またはオメガ11の生存技術を練習してお待ちください

わたしと先輩（前書き）

記憶力に自信のない俺が頑張った

マジ頑張った

一日中超頑張った

……模様替えしました

わたしと先輩

先輩と話した夜は先週のこと。

今はすでにテストも終わり、結果が廊下に張り出されていた。

優越感や勝利感。

劣等感や敗北感。

心の流れ渦巻くその一角は私が立ち入るのを拒んでいるようだった。

一人で行く気にもならず、見ていないという私の言葉に何を思ったのか。

コルトは放課後に一緒に見に行こうと誘ってきた。

断ろうかと思ったが人の少ない時間帯なら大丈夫だろうと頷いた。興味があつたのも確かだった。

張り出されているテストの結果は三種類に分かれる。

筆記、実技、総合。

更に細かく分かれていくのだが大きくはこの三つで表される。

総合は筆記と実技、内心から点数が決まる。

内心は教師からの点数。

確か筆記よりも実技が、実技よりも内心が大きく評価されるはずだ。知識よりもモンスターとどのように付き合えるかが重要視されるのはブリーダーを育成するためだろうか。文字と数字がギッシリと書かれている。

新入生向けの説明会でこの表の見方を説明していたのを思い出した。上から順に優秀な生徒の名前が、その右隣のマス目には各科目の点数が並んでいる。

私は筆記でコルトに勝っていた。

普段は僅差で競っているのだが初の快勝である。

嬉しいようで、なんとなく複雑な気持ちだった。

複雑な言い知れない気持ちに悩んでいると先輩と会話した夜を思い出したが、きつと私の実力だろう。

そう言い切りたくなかった。

だが、そう言い切れるほど私は自惚れているわけでは無い。

それでもただ会話しただけだとも思う。

良い気分転換になったわけだが、それが全部なわけでもないのだろう。

認めるのが悔しいという気持ちもある。

だから、先輩が半分。

私が半分。

そういうことにしておこう。

ここにいない人物のせいで悩む私はなんなのだろうか。

あの先輩を少しだけ恨めしく思った。

実技はコルトに負けていたが、総合では勝っていた。

可愛らしく悔しがるコルトの頭を撫でたくなかったが触らぬコルトになんとかやら。

わざわざ怒らせる意味も無いのだ。

コルトがレディール先輩の結果を見に行ったので着いて行くことにする。

筆記の結果。

一番上は空白で、マス目に数字だけが書かれている。
100がずつと続いてときどき50を見かける。

その下にはレディア先輩の名前。
そしてずらずらと並んでいるが同級生とすら親交の浅い自分が知っている名前は無かった。

そして時々見かける空白。

……下の方にあつたシルフィーユという名前については何も言えない。

「あれ、おかしいな？」

コルトがレディア先輩の名前を見ては満足し、見ても満足し、を繰り返しながら実技と総合を見終わってこちらに歩いてきたのはそんな言葉とともにだった。

「ん、何か気になることでもあつたの？」

「だって筆記には取れる最高点が書かれてるでしょ、一番上の名前が空白のところでも実技と総合には書かれてないもん」といか私たちのところにはどこにもそついうの無いけど、なんで先輩の筆記だけ最高点が書かれてるのになつて」

コルトは空白のところが気になつたようだ。

確かこの空白は配慮のために名前が書かれていないだけだつて話を聞いたことがある。

さて、コルトにどう伝えようか。

「ええとね、これは……」

「これは家名が無い生徒なのよ」

「あ……っ こんにちは!!」

言葉に詰まっている私の後ろから声が聞こえた。

コルトが突然、礼をし出したからあわてて振り返った。

私の後ろには学長が立っていた。

「あ……っ、こんにちは」

「はい、こんにちは」

驚いて詰まってしまった私の挨拶にもこやかに学長は挨拶を返した。

この人が怒っているところを見たことが無いと言われるくらい、いつも微笑んでいる。

男子生徒にもファンが多く、人気も高い。

「あの、さっきの話ですけど……」

コルトが恐る恐る、といった体で話し始める。

学長など学校にトップであり、凄く偉い人というイメージしかない。もちろん、私たちとは接点がないので緊張してしまう。

「ああ、この空白でしょう。これはね、一種の配慮なの」

学長の説明では実際には生徒の名前があるのだが、書くことは出来ないのだそうだ。

この学校はどのような人であろうとも試験に合格すれば入学できるが生徒の大半はブリーダーやその他の職種の子供だ。

なぜなら、学費が高いから。

この一点に限る。

そんな理由から家柄がお世辞にも良いとは言えない生徒は少数だ。

それに反して、私の様に神官の家系やコルトの様にブリーダーの家系、大商人の家系などは家名を持っている。

しかし、少数の生徒は家名がない。

それが大きく関係している。

簡単に言ってしまうえばプライドの問題、それだけだ。

家名が無い人間を見下している選民主義の人間が自分よりも順位が高ければどう思うだろうか。

好意を抱くことは決して無く、逆に疎ましく思うのではないか。

なんとか自分を満たそうと、原因を駆逐するために陰湿な手段や過激な手段を取る生徒がいたために今のようになっているのだとか。

昔と比べれば激減したのだけれど、それでも執拗に狙う生徒が後を絶たないのは悩みどころなのよ……努力している子が報われないのはホントに残念ね、と苦笑いする学長に何時もの朗らかな雰囲気はなかった。

「……なんか、ごめんね」

「え？」

気まずい雰囲気になってしまったのを察したコルトが学長に帰る旨

を伝え、跋ぼつが悪そうにしていた学長も先ほどの雰囲気とは打って変わって微笑みながら見送った。
学長もこんな雰囲気にするつもりは無かったのだろうか、つい零してしまったのだろうか。

そんな微妙な空気の中、二人で肩を並べて　コルトは少しばかり背が低いので少し目線が低いのだが　コルトが呟いた。

「ほら、リオってテストの張り出し表を見に行かないでしょ？だから興味ないのに気を使わせちゃったかなって　変な空気になっちゃうし、誤っておこうかなって……」

「そんなこと無いよ」

落ち込んでいるコルトは可愛かったが今以上に気がめいると間違いなく泣いてしまうだろう予想が経験から導き出された。
慰めるのが多分、一番だろう。

「興味はあつたけどね　人がいっぱいいたから近寄れなかったの、人ごみは苦手だし　それに……」

言葉を溜める。

コルトが聞き返すまで溜めるのが大事。

「それに？」

「ううん、別に」

「総合でコルトに勝ってたしね」

「あ、ひどーい。次は私が勝つんだからね!!」

「さ、早く来い。私の元に追いつくべきだ」

「あ、ひどーい。次は私が勝つんだからね!!」

「さ、早く来い。私の元に追いつくべきだ」

「あ、ひどーい。次は私が勝つんだからね!!」

「さ、早く来い。私の元に追いつくべきだ」

「あ、ひどーい。次は私が勝つんだからね!!」

「さ、早く来い。私の元に追いつくべきだ」

「あ、ひどーい。次は私が勝つんだからね!!」

「さ、早く来い。私の元に追いつくべきだ」

「あ、ひどーい。次は私が勝つんだからね!!」

「さ、早く来い。私の元に追いつくべきだ」

「あ、ひどーい。次は私が勝つんだからね!!」

「さ、早く来い。私の元に追いつくべきだ」

「あ、ひどーい。次は私が勝つんだからね!!」

「さ、早く来い。私の元に追いつくべきだ」

「あ、ひどーい。次は私が勝つんだからね!!」

「さ、早く来い。私の元に追いつくべきだ」

「悪魔でいいよ 悪魔らしいやり方でコルトをイジるから」
「やっぱり3:7に変更である。」
にやりと笑う私は少しばかり先輩に毒されたのかもしれない。

「……………リオのいじわる」

ムクれたコルトを無視してテストの結果を思い出す。
実技がすべて0点と総合が圧倒的に悪いビリの空白があった。
なんとなくだがバンダナの悪魔な先輩を思い出した。
たぶん、気のせいだろう。

わたしと先輩（後書き）

メタルナーはちょっと違う気がする。

なんというか、なんだろう。

わたしと先輩、ときどきようせい（前書き）

すべて実体験に基づいています

という夢をみた

わたしと先輩、ときどきようせい

テストが終わり自由を謳歌している私は正直な話、実技が苦手だ。実技が、というよりも運動全般が苦手だ。

それでも実技が得意なコルトに引き離されないように相応の努力はしてきた。

してきたのだが、超えられない壁があるらしい。

その壁とは、モンスターの騎乗訓練だ。

騎乗は得意では無いが構わない。

ただ、ロードランナーが苦手なのだ。

周りでは悠々と私を無視するかのようにロードランナーに乗り、走り回っている。

コルトなんて得意な運動と好きなモンスターとの触れ合いが合体しているようなこの授業で高揚しているのだろう。

笑顔ではしゃいでいる。

それに比べて私は傷だらけの、土まみれ。

騎乗する(予定の)ロードランナーからは呆れたような気持ちが伝わってくる。

恐怖を押し殺して何度も行うがその度に恐怖で足が竦む。

手が震えて、まともにつかむことが出来ない。

諦めようか、こんなに必死になって出来ないなんて恥ずかしい……。そんな事を思い始め、油断した際にロードランナーは走り去ってしまった。

気持ちを読み取ったのだろうか。

モンスターは殊更そういつたことに敏感だと聞く。

ロードランナーの後ろ姿を見ながら感じるのは憐みだった。
ときどき嘲笑われている感じもする。

もう辞めてしまおうなんて気分だった。

そんなとき、授業の終わりを知らせる鐘が鳴り響くのを聴いた。

コルトが私に気付いて声をかけてきたがそれを無視して走り去った。
穴があつたら入りたいくらい恥ずかしく、コルトの優しさを無視し
た自分を消し去りたいくらいだった。

それでも、あのときコルトに伝えて普通にいられる余裕が無かった。

夕ご飯に顔を出さず、門限を超えても部屋に戻らない私をきつと心配しているだろうコルトに内心で謝りながら腰を下ろす。

疲れたからか、それともここが目的だったのか。

いつか先輩と話をした時計台に来ていたのだ。

奇しくも座っている場所も同じであった。

先輩も今日はいないだろう、と考えながら闇夜を眺める。

私の心と同じくどんよりと曇って、更に闇を深くしているようで身

体をぶるりと震わせる。
そういえば前と違って寒いなど思っていると空からコートが落ちてきた。

半分驚愕、半分納得しながら見上げると前と同じように空を眺めるバンダナ男。

怪人アックマバンダナーこと先輩が時計台のてっぺんに座っていた。

「……なぜ先輩がここにいますか」

落ちてきたコートは先輩のだろうと当たりをつけて羽織ることにする。

断りはいらないだろう。

……偶然、落としたのなら別なのだが。

「今学期の俺は毎日空を見上げているのだよ、後輩」

「はあ、そうですね」

やはり変わった先輩なのだが、彼らしいと思った。

暗かった気分もどこへやら。

こんな単純な自分も悪くないと思ってしまつのは悪魔の力が、人徳か。

不思議な人物だ。

「それよりも」

「なんですか」

「何を世紀末の中、消毒されそうになった顔をしているんだ」

「それってどんな顔ですか……」

げんなりとしながら言い返すも先輩は変わらない。
変わらないのか変えないのか、付き合いの浅い私にはわからなかった。

「まあ、落ち込んでるといっうか」

「最初から言ってくさいよ　いっうかよくわかりましたね」

「見ただけでわかるのは確定的に明らか」

変わった物言いをしながらも先輩は私の心配をしているようだ。
本当に噂とは……私は何度噂と先輩を比べているのだろうか。
それぐらい聞くのと見るのでは大違いな先輩が悪いのだ。
先輩が完全に悪い。

「冗談だ　俺には沢山の弟と妹がいる」

「……妄想？」

「……まあ、いい　俺の弟妹はキョウタイ我慢強くて自分で何も言わねえから
察しなければならん　だから、なんとなくわかる」

「はあ、そんなんですか」

悪魔の弟と妹ってどんなのだろうか。

人を食べる？

火を吹く？

我慢強いつてことは普段は隠れ、夜になると人を襲ったり。でも、そんな事件なんて無かったし。などと失礼なことをつらつらと。

「もしかして、話を聞いてくれるんですか」

「聞くだけならな　だが、悪魔のアドバイスは破滅に向かうかもしれない」

「……気にしてるんですか、悪魔」

「さて、な」

にやり、なんて底意地の悪そうな顔をしている先輩にムツとした。相変わらず空を見上げたままだがどうやら私の動向はわかるらしい。にやにやと人の悪い笑みがさらに私の機嫌を悪くさせる。

が、なぜだか話してみようと思った。

きっとこの人は私を馬鹿にしない。

そんな確信めいた思いが私の中にはあった。

「騎乗訓練の話なんですけどね」

「ああ、懐かしいな　モンスターに乗るやつだろ　ロードランナーかライガーか……今はロードランナーだな」

私の話を聞くだけと言いながらいきなり話し出したこの人はなんなのだろうか……。

「騎乗は苦手ってわけではないんです　ライガーには乗れました」

でも、ですね……」

「ロードランナーが苦手、とかか」

「っ!？」

くくく、当たりかなんて笑うこの人はホントになんなのだろうか。
心が読めて、私の事を見透かしているんじゃない……などと思えるくらいに笑っている姿が悪魔然としている。

「ちょうど似たような状態になったやつがいてな、後輩 おまえによく似た状態かも、な」

幼少のころにロードランナーから振り落とされたことがあるから苦手になった。
精神的なトラウマの克服は難しいし、必死になっても改善されなかった。

何度も訓練をしたが結局は挫折。

このままブリーダーになれるとは思っていなかったが案の定、壁にぶつかつた。

私の必死に挑戦する素行を顧みて、教官は単位をくれるだろう。

だが、本当にそれでいいのかと思っていた。

逃げることになるんじゃないかと。

また、逃げるのは嫌だった。

「そいつはメーカー志望でな バトルを諦めたブリーダーなら多々いるが初めからってのはかなり珍しいそうだ」

「……」

「空のレースで天を目指しているんだと」

レースを知らない私でも知っている、ライダーの憧れ。

過酷な四つのレースを制覇した覇者に送られる称号、エデン・ウォーカーに名を連ねる。

わたしたちで言う、名人のようなもの。

そこにたどり着く事を天を目指すというのだと聞いたことがある。

「昔、といつても俺も聞いた話だがな そいつは空から落ちたことがあったんだとき 深くは聞かなかったが、死ぬ可能性もあったんだろう」

曇った空を眺めながら、語る。

声量は大きくないのだがはっきりと聞こえる。

先輩は何を見ているのだろう。

「それでも諦めずに空を目指して 俺が初めて飛んでいる姿を見たときは思わず感嘆の声を漏らしてしまった」

この先輩が声を漏らすほどの飛行。

私では想像もつかない素晴らしさ、ということか。

「今学期の初めくらいかな 天気の良い空だった」

トーンが下がったまま話を進める。

思わず先輩の顔を見てしまったが、変わらず視線は曇った空に固定したままだった。

「あいつを無理矢理にでも止めるべきだった ただ俺も心のどこかで見たかったんだろう ここに座って、空を眺めて、心行くまで楽しむつもりだった」

雷が昔から怖かったが、そのときほど怖いとは思わなかった。
先輩が呟いた。

「あいつが光に包まれて、遠くの方で落ちていくのを見た まるで重力の鎖に捕まったかのように騎乗していたドラゴンとともに墜ち

ていたんだ」

あとは必死であんまり覚えてない。
気付いたらあいつを担いで医療室に駆け込んでいた。
悪魔なんて呼ばれているが、俺なんて所詮はこんなもんだ。
そう自嘲気味に呟く先輩に私はなんて声をかけたらいいのかわからなかった。

「あー、まあ そういうことだ どうだ、参考になったか？」

「いえ、暗くなりました」

暗くなった空気を無理にでも飛ばそうとわざと先輩が明るい声を出す。
はつきり言って似合わなかったがそれを言って台無しにするのもあれなので、乗ることにする。

「手厳しいな」

「……先輩は話が下手ですよね」

落ち込む先輩を見ながら内心で喜ぶ。
日頃から募った怨みを晴らせたような気がして少しばかり気分が良くなった。

「まあ、慌てるなよ 話はまだ終わったわけじゃないからな」

「……終わったっばかったんですけど」

しかもその人が空を飛べなくなったような感じで。

完全に諦めると言われているのかと思ってしまうた。

「なあに、まだ終わらんさ そいつは空が好きだと言ってたよ、療養中もな でも怖いとも言ってた」

震える身体を押しながら、実技に挑む姿。

モンスターに触れることすら恐怖。

空が好きで、飛ぼうとして、諦める姿。

憧れに手を伸ばして、伸ばせなくなる恐怖。

それでも必死に、自分に言い聞かせる姿。

天を目指すと、天に届くようにと。

「片羽の妖精が羽ばたいた 今日、俺の見てる前で妖精は飛ぶ空
を見てる、目を離すなよ」

あれのために今日まで待ったんだ、と笑う。

今までの話が全部うそだったのではないかと思う程楽しそうに。

「今、この世で最も綺麗だろう」

そして一言呟くと雲が吹き飛び、空が晴れた。

丸い月が、浮かんでいる。

「魔法使いの俺が言うんだから間違いない」

「……」

声が出なかった。

驚きと、その姿に。

月を背に空を飛ぶドラゴン。

空が輝いてるかのよういきらきらと。

「どうだ、後輩」

きつと何時ものように人を食ったような笑いをしているだろう。
それを見るために振り返るのも惜しい気がした。

ドラゴンは無骨で、凶暴。

そのイメージを破壊して、美しさのみで象ったような。

「……先輩、ピクシーってモンスターじゃなかったんですね」

「あいつをなんで知ってるのかと思ったが勘違いか」

「みたいです」

「飛んでる姿が妖精みたいだろ、あれ ピクシーって俺が呼んでるだけだからな」

幻想的なほどにあのドラゴンは綺麗だった。

「帰りますね、先輩」

「気を付けるよ、後輩」

この光景は先輩のためのモノだろう。

何か月も空を見続けた先輩の、かけがえのない幻想。

小さな悩みから生じたお零れで奇跡を得た私が最後まで見るには、あのライダーに失礼な気がした。

名残惜しく思いながらも俯いて、寮に向かいながら言葉を紡ぐ。

「……先輩は話が下手ですね」

「そうか」

先輩はきつと笑ってる。

「……でも」

先輩を見ながら言うのは負けたような、恥ずかしいような。そんな気持ち。

「私も頑張ろうと思います」

もう離れて声も聞こえないだろうところから不意に聞こえた言葉。

「お前なら大丈夫 やればできる 俺が言うんだから間違いないねえ」

「魔法使いの俺が、ですよね」

クスリと笑いながら返事をした。

聞こえていないだろう私の返事。

でも、きつと聞こえている気がする。

だって悪魔のクセに魔法使いで不思議な先輩だから。

普通の人には欲張りだけど、あの人になら許せる。

寮に近づくとざわつく感情の流れ。
気付いたんだ。

先輩の心は静かだから、落ち着くんだったって。
本当に不思議な人だ。

今の私は笑っているだろう。

寮に戻ったらコルトに謝って。

明日はロードランナーに謝って。

また、やり直すんだと心に決めて。

思い出すことがある。

その日の空が、本当にきれいだったと。

わたしと先輩、ときどきようせい（後書き）

これでリオ編を終えておきます

書いたらめっちゃ長そつだし

今後も小出しで行こう

小出しで

おれとえりーと（前書き）

ふひゃあ、眠れないぜえあああ

眠くないぜえああああああああああああああ

って感じで書きました。

大丈夫だ、問題ない。

おれとえりーと

リオがときどき無表情で俺を見つめているときがある。
ちよつと怖い。

ロードランナーで買い物に行くときは誇らしげで可愛いのだが、俺のほうをチラッと見てからあからさまにため息をつくのはY A M E R O

グレードC選抜の招待状が届いた。

……招待制だったのか。

危うく何も知らずに力チ込むところだった。

グレードというのはモンスターのランクである。

段位はブリーダーク。

ちよつとした違いがあるのだ。

そんな風に考え込む俺にリオが不思議そうに声をかけてきた。

知らなかったと正直に話そうかとも思ったが、リオは俺がなんでも知ってるマジパネエ知識人だと思ってる節がある。^{インテリ}

モンスターの育成を自慢げに語ったときなんか、尊敬とかそういう類の眼差しだった。

なぜか助手一週目で忠誠度MAXだった気がする。

普段は気後れなく毒を吐くくせにそういうところがあるから俺も引くに引けないのだ。

別に理由はないけど他人の憧れを否定するほどの権利をもってるわ

けじゃないし。

……カッコつけたいただけです。

とりあえずリオに適当なことを言っておく。
これほど遅れたのは素行や世間体のため。

選抜の優勝者は大陸対抗戦に出場することになる。

協会はライバルであるFIMBA（相手の大陸の協会）に見栄を張りたいし、勝ちもしたい。

特殊派生のモンスターやこの大陸独自のモンスターを育てているブリーダー、出来るなら実力も期待できるものが欲しい。

両方兼ね備えている俺の力は喉から手が出るほど魅力的だ。

Sグレードの上位並の力を持つドミナント。

しかも種族は特殊派生。

見た目も神々しい輝きで高貴のある佇まい。

そこで俺の素行が問題となる。

魔の鮮血事件やルーキーキラーの当事者である俺を出すには抗議が絶えないだろう。

このジレンマがこの時期まで延びた理由だ、とニヤリ笑いとともに説明する。

おおー、なんてキラキラしている後輩の純真さが俺の両親、は最初からこの世界にいない……じゃなくて良心を削る。

でも、まともを考えることもできるんですねって一言多いと思う。

まあ、俺の予想が当たってるとは思っけどね。

ドミナントってカウレア火山の守護神様だし、特殊派生の中でも格が違っわけなのよ。

俺でマイナス評価が付こうとも、ドミナントのプラスは消しきれないのだ。

……なんかむなしくなった。

イレギュラーのボディでも磨いてくるか。

温泉はいいね。

温泉は心を潤してくれる。

リリンの生み出した文化の極みだよ。

なんて言いながらドミナントに湯をかける。

燃えてるこいつを洗う必要性に疑問を感じるが思いつきなので良しとしておこう。

そういえば、イレギュラーは温泉に入ってはダメな気がする。

大丈夫だとしても色が変わるかもしれない。

まあ、リオと遊んでるからどうでもいいのかもしれないが。

ごぼごぼと煮立ってる風呂に入るのも慣れたものだ。

温度調整できるクセに俺と入るときだけドミナントは全力である。

蒸発すると温泉の成分がめっちゃ臭いので煮立つ程度に調節しているのは器用というかなんというか。

溶岩を風呂の代わりにしてたとか、そんなワイルドさを感じる。

まあ、無いだろうけど。

食後のコーヒー。

これが私の活力です、などとカッコつけながらココアを啜る。

コーヒー？

あんな苦い毒物を俺に飲むとか神経腐ってやがる。

まあ、俺の家には飲むやついねえから。

リオに笑われたときに飲む練習したけど無理。

飲めるけど好んで飲むものじゃないから。

いや、マジで。

……つうかりオって住み込みでやってるけど、助手って一週間に一度顔を出すだけでもいいって知ってんのだろうか。世間知らずっぽいなあ。

それとなく聞いたら家が遠いかし楽しいから大丈夫らしい。

なんと無防備な。

俺じゃなかったら、チヨメチヨメされるところだぞ。

まさかレッドとコルトはチヨメチヨメしてるんじゃない。

全年齢ゲームに隠された秘密！！

ブリーダーと助手の卑猥な関係！！

なんて馬鹿なことを考えながら文々。新聞とあだ名をつけてみた新聞を流し読み。

この新聞はスキャンダル大好き、噂も大好き、流言も発信する嘘と欲と趣味に塗れた糞のような奴らが書いてると思ってる。

俺の公式戦についての評価は凄かった。

こいつのせいで人気下がってるんじゃないかってくらい扱き下ろしてくれた。

その癖、写真は良い物を使ってるから始末が悪い。

ドミナントが大会に優勝したことの記事は毎回チエック。

保存用は俺のスクラップ帳に、日常用は一日の終わりに写真を切り取って飾るのが習慣である。

グレード選抜。

これに優勝すると4年に1度、友好の証として開かれる大陸対抗戦に出場できる。

最も優秀なブリーダーを見せつけたいという子供みたいな思惑とかもあるんじゃないの。

別名・協会対抗戦。

つまりオリンピック的な何かだ。

ニュアンスは合ってると思う。

まあ、そんなわけではほとんどの国民が注目してるくらいだから名声を得る機会としてはかなりのもの。

バトルで言う四大会やレジェンド杯を優勝したり、円卓、地平線、蒼海などのレースで優勝するくらい凄くないかなと思ってる。……ピクシーに思っても言わなかったけど、レースの大会って中二くせえ。

ほとんどってことは金が無い奴は見れないんだだけだね。

レースはチラッと見えるけどバトルはさっぱりである。

やっぱり金だよな、金。

金があれば、金があればって。

人く金である、間違いない。

……なんてね

でも勝つ気が無いのはダメだし、戦いに清潔を求めるのはクズのすることだ。

自己満足のためにきれいな戦い方をしても稼げないなんて、馬鹿な話だろうよ。

モンスターは寿命を削って戦っているわけだし。

選抜戦は長くなりそうだ。

それほどまでに慎重なのだが、協会も神経質になりすぎてる。

予選 決勝なんて形式をとるのだからサイコ にダルい。

予選で総当たり。

勝ち星の多い1位と2位で決勝戦をして白黒つける。

普通のモンスターならヤバいな。

市場のモンスターや家名の無いブリーダーなんて特殊なことが無い限り招待されないから普通のモンスターなんて見ないだろうけど。

予選は開幕ファイアウェーブで焼き払い余裕でした。手加減して火力は抑えているので死にはしないはず。

ドミナントの凶悪性に気付いたのは極少数。

ブリーダーならノラモン全部とは言わないがフェニックスの知識くらい持つとけよ、と。

モンスターには悪いが、棄権しないブリーダーに罪がある。

グレードは多分、B止まりだな。

家紋持ちのくせに後継ぎは自分の力と勘違いしたボンクラか、モンスターが優秀過ぎたか。

家紋とは協会が家名とともに与えた証である。

特殊派生のモンスターを再生したり、優秀なブリーダー・メーカーを過去に輩出したシルシ。

ただ、それだけである。

ただ、それだけがモンスターを中心として回っているこの世界には重要なのだが。

最初の家紋はモンスターの姿を模った一枚の小さなコインだったはず。

名人には殿堂入りしたモンスターのコインが送られるはずだ。

他の家紋はその家を代表するモンスターが描かれた旗か何かだ。

大々的に家の力を見せつけようとして服や馬車に刻むのは履き違えていると言っても過言ではないと思ってる。

ブリーダーならモンスターで競うべき。

ちなみに家紋持ちなら家名持ちだが逆は成り立たないのだ。

イメージは家紋+家名>家名>無し、みたいなヒエラルキー。

協会も家紋持ちばっかでやってられねえわ。

要約すると

家紋を持つてるってことは特殊派生のモンスターがいる。

秘術で合体させて特殊派生を受け継ぐ。

つまり単純な話だがうまく育てればめっちゃ強い

金持ち

俺たち偉くね？

ってわけだ。

うわあ、やべえよこの世界。

リセットすべき。

今の名人は家名持ちだが家紋なしだったので殿堂入りした時のコインを家紋にしているとか。

デンドーコインって響きが安いロボットみたいじゃないだろうか。

家紋有りより家名のみの方が最近強いっぽいな。

家紋も微妙だな。

権力争いでも家名オンリーが押してるし。

モンスターの血がオリジナルより薄くなってるのが原因じゃないかと考える学者もいたような気がする。

結局俺みたいな家名なしはほとんどいないけどね。

まあ、干されたりとか色々あるし。

同期も家名なしとか超少なかったし、こんなものか。

気持ちだけで、いつたいなにが守れるっていうんだ！とキラキゅん

ごっこ。

ふははははははー！！

お前らの自尊心で、モンスターが焼けるぜ！！
特殊派生で家紋のモンスターといっても下手なブリーダーが育てれば鈍らの刀だろう、と。

死ねや金持ち、はいだらー！！

とかやっつてれば勝てるので消化試合である。

なぜこんなに頑張るのかといえば、やはり俺がホリイ派であるからだ。

アテイ先生目当て。

あと金。

ベルフラウとアリーゼが未だに助手をしてるはず。

うわあ、会いたくねえ。

アリーゼはいいけど、あのツンデレはだるいから会いたくねえ。

1、2、4の人はいないのになぜ3はいるのだろうか。

似てるからあだ名で呼んでるだけだけ。

そのうち出会うのだろうか。

あ、パツフェルさんとポムニットさんがいたわ。

ロードランナーがいないときは代わりにどちらかが配達に来ていた気がする、走って。

ファームの中には入ってこないけど。

2と3、4が登場。

いつかは1の人も見かけられるかもしれない。

圧勝である。
マジで圧勝。
そしてブーイング。
なぜだし。

決勝は一度棄権した先見のある家紋持ち。

総当たりにしたから時間を食ってしまった。
もう夕方だ。

ブラッディJとか生で見ると艶が違う。

やはりモンスターを生で見ることのできる感動は一味違う……ッ!!

折角なのであだ名もつける。

ジヨニー・ライデンとかつけたかったけど長いからなし。

無表情っぽいのに、レッドに似たものを感じる。

……そうだな。

レイヴンにしよう、そうしよう。

クチバシと鉤爪のみで押しているドミナントを下がらせる。

魔力を声に乗せる。

多分、それほど大きい声じゃないけど会場中に響いてるかなー
そして真顔でキメる。

俺もやるときはやるのだ。

遊びを全力でつてことだが。

疑問に思いながらも様子見している相手に言つのはあの言葉。
大胆不敵に

認めよう、君の力を。今この瞬間から、君はレイヴンだ。

みたいな

俺って新人だからね。

しかもブリーダー歴は半年も経ってない。

まあ、ほら、ドミナント様のおかげで俺も歴戦のヒールブリーダー。
威圧感もたっぷり不自然ではない。

むしろ、俺が格上である。
よく考えたら自然なことだったぜ。

だが安心しな。
すぐに楽にしてやるよ。

あはははあははは、なんて高笑いとともにドミナントの火炎連砲。
実はこの技、大変レアである。
ほとんどのブリーダーが一生拝めないレベル。

モンスターには善悪がある。
覚える技も様々だが、善悪が結びついている技も少なくない。
そして火炎連砲とは圧倒的に善に傾いているヒノトリが悪になった
時に覚える技だ。
育てやすい善を悪にする人間はいないし、そもそも悪になれない。
ゲームではバグか設定ミスかどんなに頑張っても火炎連砲を覚える
まで悪に寄らないのだ。

その点、ドミナントは違う。
善悪なぞ知らんとばかりの自由さ。
きっとこれが火炎連砲を覚える秘訣……！！

まあ、善悪なんて人間が決めたものだしな。
言うこと聞けば善、それ以外は悪。
最も悪いモンスターでもブリーダーの命を取ったりはしないのに極
悪である。

たぶん、悪戯つこなのだ。

極悪モンも寂しいとかそういう感じじゃねえの。
テキトーだ。

そこら辺はテキトーでいいと思ってる。

ドミナントのステで力は低い。

火炎連砲の威力はD。

グレードCには重い攻撃だと思っている。

それを乗り越えて走ってくる姿を拝むことになったのは俺の油断か。
若しくは、ドミナントが甘く見過ぎたせいか。

火炎を切り払って進む姿はまさに凶鑑の説明通り。

戦士そのもの。

ダメージを受けていないのかと思う程に愚直。

それでも力強く走るのはモンスターの性格か、ブリーダーの腕か。

いい戦士だ。

思わず呟いた。

それと同時にドミナントはVの字に斬られた。

歓声が湧く。

会場が揺れているかのように。

歓びで、満たされる。

今まで無傷で、傲慢な悪が斬られた。

確かに斬られたのだ。

夕日に照らされた深紅の鎧はおとぎ話の勇者のようで。

ゆっくりと倒れる青白い炎の鳥は化け物の様で。

その時、その紅い赤い鎧を持つモンスターは英雄だった。

追伸

宇宙人と俺。

新しい小説のタイトルが決定だな。
嘘だ。

この宇宙人、なんかこの星に興味があるとか。
コンバットしてみたいんだとさ。

あー、どうなんかなあ。
出られんのかな。

今度協会に連れてってみるか。

ヘンガーとか作ったんじゃないかな、この人。
かなり強いし、GANTZの星人としても活躍できるよ。
ホント。

点数は5、いや……7点くらいかな。
リーダーは強いから20くらいかも。

え？

エイリアンハントを点数制にしてみた？

へー。

ふーん。

ほー。

おれとえりーと（後書き）

ペるそなあ！！ってしたい

主人公は魔法使いだからね

学校時代はカジャ系に世話になったはず

おれとレイヴン、ときどきレッド（前書き）

薄い。

圧倒的なまでの内容の薄さ。

もっと主人公のコミュの話をしたかったがだるかった。

追々出すから許してね。

……続けば、だけど。

おれとレイヴン、ときどきレッド

倒れたドミナントを見ながらブラッディJを眺める。

デュラハン族のヨロイモンスターはなぜあもカッコいいのだろう。

ノーマッドも嫌いじゃないぜ、切ないけど。

でもブラッディJって悪モンだろ。

なんだこの人気。

俺ら人気なさ過ぎて泣きてえ。

白い炎が地面から噴き出した。

まるで光が逆流するかのよう。

初めて火を得た人類とはどういった気持ちだったのだろう。

人知を超える強大な力を間近で見つめるとは。

神々しくも原始的な恐怖が、そこには在った。

夕闇に染まったはずの空が青く燃えていた。

ドミナントがブチギレてやがる。

普通の悪モンってやつなら格下と侮った相手に傷をつけられたことで怒るのだが……。

チラツとこちらを見た瞳には正気が宿っている。

肥大しきった自分の慢心に、か。

素晴らしい心をお持ちのようだ。

好きにするといいな。

どうせ殺さないだろうが、殺すなよと言っておく。

一応、ブリーダーらしいことはしようかなと。

……審判、そんなに怯えんなっつうの。

状態は、うむ。
たぶん、いや間違いなく憤怒。
相手は底力だったんじゃねえの。
良いモンにしたのか。
なんか微妙だな。

状態つてのがある。
まあ、怒りっぽい人とかいるじゃん。
ああいう感じ。
底力はダメージ2倍、憤怒はダメージとガッツダメージが2倍。

ガッツはやる気で、これが無いと技を出さないのな。
MPとかと同じ。
テイルズのTPみたいな……ちょっと違うわ。
まあ、あれだ。
マーボカレってどうなの？
美味しいの？
言峰なの？

まあ、ガッツがあれば技が使えるってことだ。
攻撃喰らうと微量だがガッツが下がる。
それが2倍。
ガッツダウン技というのもあるがそのままだから多分わかってくれるだろう。

ブラッディJが走り回っているがもう終わりだ。
英雄ってのは生きてるからなるんだろうか。

俺的には死んでからが本番だと思う。
語り継がれる的な意味で。

だから、さ。

頑張ったと思うよ、うん。

確かに英雄だったね。

まあ、俺的な意味のほうだけど。

足掻くな。

運命を受け容れる。

青い炎が闘技場に焚ける。

上に抜けるように炎を噴出したから見た目ほどヤバくはないんじゃないかなど。

いいモンスターだ。

また一緒に戦いたいものだ。

俺の眩きはドミナントの炎にかき消された。

賞金を受け取って帰ろうかとも思ったが未だにほかのところをやっているらしい。

俺がストリートつつつか早すぎただけか。

D選抜の前まで来て、すさまじい歓声に興味を持った。

上位グレードなら見ごたえあつてこうなるかもしれないが、下位では微妙だと思う。

俺らはマジで特殊すぎだからねっ！！

べ、べつに……早く行くか。

ドミナントに飛び乗って上からダイナミックエントリー。

思わず動きが止まる。

まさに裏切られた気分だった。

勝利を収めていたのはレッド。

それはいいのだ。

彼は才能に胡坐をかかずに努力しているから。
問題は一つだけ。

こいつのモンスターだ。

この前のモッチーとは違う、コイツのモンスター！

ドミナントに指示を出してレッドの元へ降りる。

目を極限まで見開いて、口を開けて呆けているコイツは珍しい。

何を驚いている。

俺がいることが。

それともお前のモンスターを見られたことが。

言うことは決まっている。

お前には失望した。

もう期待はしない。

それだけ言うと俺は振り返らずに飛び去った。

家紋持ちだって知っていた。

だが、あいつは俺を裏切った。

俺の気持ちを裏切ったんだ。

まさか、あいつの受け継いだモンスターがピクシー族だったなんて。しかもポワゾン。死にたい。

何、あの勝ち組。

テンション下がった俺は応援していたリオを連れて飛び去る。

きゃー、人攫いよー！！

連れ去れたぞ！！

悪魔め！！

とか聞こえるがそんなことはどうでもいいのだ。

イレギュラーが守るそぶりも見せずに着いてきてるんだから大丈夫だろうが。

次の週に大陸対抗戦の招待状、あとは少しのファンレターと抗議文章が届いた。

脅迫文や怪文章も混ざっていたので取っておく。代わりにピクシーへの手紙を渡す。

5枚溜まったらゼリーもどきの当たり風にサービスしてもらえる権利をやる。

法的機関に、だが。

抗議は読まずに燃やす。

目は通してあるから安心して欲しい。

罵倒ばかりなら残念ながら5枚溜めるまで待つとしよう。

お待ちかねのファンレターである。

世話になった先生や同期からもっさり来てテンション駄々上がりですの。

俺の同期は癖がありまくってヤバいぜ。

マジで。

アームストロングからふつーの祝いの言葉と泣き言。

姉の元で今年も助手をしているらしい。

家督も姉に取られて大変だ

……オリヴィエさんめっちゃ怖いし、仕方ない

レックス先生とアテイ先生からは激励の言葉。

超聖人クラスの双子は格が違った。

双子姉妹がタッグの対抗戦に出るなんて見えない。

俺の視界には何も残って無いな。

おめでとウサギ的な激励文章を送るか。

礼節に則って。

リオが驚いている。

え、俺がお祝いの手紙出すのってそんなにありえないわけえ？

これでもピクシーに送ってるんだぜ、一応。

がくちよーにも。

エヴァ先輩からも来てた。
貴女の高笑いが移りました。
ロリババア乙、と。

うわっ、キラさま（笑）からも来てる。
しかも内容は批判ばかり。
祝えよ、空気読んで。
ピンク教に絞られてる。

いつものファンレターにいつもの返事を書く。
枚数は十五枚。

手紙は苦手だがこれは全力である。

丁寧に、すべてを。

あとは円盤石とともに封入。

壊れやすいので注意と張り紙してパーフェクト。

時計台の後輩からも来たので丁寧に書いておく。

性格悪いけど腕はいいブリーダーのところで頑張ってるとか。

おまえならできるって書いておこう。

俺を慕ってる後輩とか少なすぎて泣いた。

たぶん他には片手で数えるくらいしかいないんじゃないかねえの。

温泉掘った時に出てきた水神の石盤をおまけにしてやろう。

来年は独り立ちするかもしれないからな。

身内には甘いのだ。

リオがそわそわしてる。

何事だし。

飽きたのでこれで今日は最後にする。

金びかの趣味悪い便箋。

つうか金じゃねえの、これ。

あとで売るか。

差出人は、ギルガメツシユ。

なん……だと……。
ビビった。

異世界に召喚されたのかと思ったほどビビった。
驚天動地だ。

あ、エルキドゥが中身書いたのか。
ビビらせんなし。

めんどいからって大会帰ろうとする、とな。
知らん。

王の蹂躪を愚民に見せつけろとでも言っておけ。
ええくすきやりばー！！

ごるでいあすほいーる！！！！

……違う王だな。

エクスキヤリバーはそもそもゲームがちげえ。

つつか誰も本名で送ってこないんだけど。

先生から何から全部あだ名。

なにこれ、仮面的な関係か何かか。

本名知らないからいいけどね。

ピクシーの手紙を手にとって外へ向かう。

気分転換である。

空の下で読むのが礼儀だろうよ、こいつのは。
リオはどっか行ったみたいだ。

追伸

宇宙人と星を眺めるのも何度目だろうか。
かなり仲良くなった気がする。

これがフォールアウト3だったら間違いなく鮮血が舞う、宇宙人のダ・カーポだったら、まあ幼女ヒロインだわな。尻尾があつたら野菜星人。世界は広い。

む、待てよ。

逸般人の俺。

この宇宙人。

超能力者のなっちゃん。

ある意味で未来人の那由多。

そしてリオを中心として回るSOS団。

完璧だ。

……ちよつと無理かなあ。

つうかなっちゃんと那由多って何処のどなただし。

今日はよく電波を受信するねえ。

宇宙人といえるからだろうか。

そういえば最近、ユズキという人間がUFOを買ったらしい。

しかも別次元世界の。

それで俺を異世界に飛ばせないか聞いたけど無理らしい。

超すげー存在を経由したからできたことらしい。

代金は不思議パワー。

不思議なパワーは俺の魔力と一緒に不思議だった。

今度、魔力と交換でUFOに乗せてくれるらしい。

超ラッキーだし。

え、買った人間？

ぶるじよあじーですね、うらやましいです。

ついしん、ひとびと

俺

いくせい、もんすたーの主人公。

バンダナ巻いて目を隠しているシャイボーイ。

自称・人畜無害のインテリ。

あだ名は悪魔とか魔王とかシャイターンとか。

嬉しくないのでござる。

モンスターファームにいる俺であって、ポケモンと戯れている俺ではない。

金が好き。

ピクシー族も好き。

弟と妹がいつぱいいる。

エロゲ主人公とは全然ちげえから、あんなホイホイ好かれるとかねえから。

あまりの境遇の違いに俺さんは絶望した。

ジャンプのハンターな漫画が復活しないくらい絶望した。

親友のあだ名はピクシー。

サイファーにでもなつて空を飛ぶつもりなのだろうか。

ちなみにピクシーの助手のあだ名はPJ。

フラグか……？

宇宙人

いくせい、もんすたーの追伸でレギュラー入りした。

宇宙に幅を利かせている人(？)。

ドラゴンが代わりに本編のレギュラー入り。

まさに宇宙人にはイレギュラーなことだった。

7点だけどリーダーは20点である。

リオ

いくせい、もんすたーのレギュラー。

時計台の後輩な人。

宅配のロードランナーはリオのだったりする。

ファームには入らないので外にミニファームが!!

先輩の配慮で後輩の憧れがドミナント。

行き来させたり、仕事させたり、先輩のアドバイスでしつげしたり。

今では先輩の大会の最中にロードランナーで陸のレースに出てブイ

ブイ言わせてる。

負けるわけないという最大の信頼が成せるわざ。

試合だけはイレギュラーに飛び乗って向かうので大丈夫だ、問題ない。

なつちん

「きつと、俺もポケモンが大好きなんだろうな……」のあの人。

原作ではサトシを小さくしてドルハウスに突っ込んだ。

こつ書くとなんか怖いな、へへっ。

朝起きたらクシで梳いた髪を留めでまとめるのが楽しみ。

ヨシナではない。

アゲハでもない。

更新は2か月前。

最近、わしの筆が重くてな……って気分。

那由多

歩くご都合主義のヒロイン(?!?)。

パンチが必殺技。

というかそれしかない。

エビワラーの生まれ変わりか何かだろうか。

主人公のチャーハンが好き。
普通のチャーハンは幻想である。
いいぜ、市販のがチャーハンを出すって言うならな……
俺がその幻想をぶち壊す！！みたいな。

ユズキ

歩くご都合主義の主人公、たぶん。
最近では老化が気になる。

UFOも買った。

NG集 01 参照。

彼はドラえもんである。

夢を、便利な道具を、音を超える強さを、チャーハンを与えた。

那由多はのび太ポジション。

本気出すと地球がヤバい。

ロシアを地図から消して、地球にダメージを与える必殺技を持っている。

シヤアも真っ青。

更新は10月くらいが最後だから、半年前くらいから停止。

復活の予定は未だに立たない。

最悪、新しいものとして書き直すかもしれない。

削除の危機。

どうにかして原作のせいです、さーせんと罪を擦り付けられないかと考えている。

女体化フェイトみたいなのがもっと露出したら再開するかも。

おれとレイヴン、ときどきレッド（後書き）

テンションってなぜ上がらないのだろう。

難しい。

とても難しい。

ピクシーと結婚するのも難しい。

だが、困難に打ち勝ってこそその男。

おれとせんぱいがた（前書き）

この物語の目標は名人になることです。

レシドレシが。

おれとせんぱいがた

荒野の果てに、一人は絶望を、一人は希望を見つめ、二人は今、運命の旅へと踏み出すのだった。
トウルルル！

絶望が俺で、希望がリオである。
風の噂で選抜戦の後にレッドが思いつめた表情でモッチー×ポワゾンの合体をしようとしたとか。

やったね、コルティア！！ 仲間が混ざるよ！！
おい、やめろ。

物凄い大事件だった。
さすがの俺でもマンナは無理。
モッチーとルージュラ混ぜてピンクに着色して癒しを抜いた化け物だぞ、あれ。
バイオであれがたくさん現れたら俺は逃げる。
サブのピクシーどこいった。
気になる？
ググれ。

そんなわけでピクシー派の俺はリオを派遣することにした。
ポワゾンを合体させるとか正気なわけ？
見損なっただけってことを伝えさせる。
コルトと仲が良いらしくて会えるのが楽しみなんじゃねえの。
レッドは俺みたいに僻地に飛ばされたわけじゃないので街の近くにファームがあるのだ。
イレギュラーに乗っていくようにとも言うっておく。

……なんか決死の覚悟っぽかったけどなぜだし。

文々。新聞を読んでもなんかすごいことになってた。

ドミナントが出るのは批判的な意見もあるが信者が云々。

信者……？

あとはレッドのマンナ事件。

家紋持ちがそれをやるべきではないとか凄い批判的。

伝統ある〜とかなんとか。

読むのめんどい。

とりあえずレッドが落ち込んでるかもしれないからカララギマンゴ
ーでも食わせればいいんじゃないやねえの。

あいつの好物だからこれで機嫌もよくなるんじゃないやね。

つまり、お腹が膨れる。

機嫌がよくなる。

モッチーと合体させるなんて、もう二度としないよー！！

あれ、そういえばバンダナってポワゾン好きだよな……。

あげるか

ポワゾンとゴールイン

俺ってばサイキョーね！

……ふむ、やはり天才の俺に死角は無かった。

リオに持たせようとしたらすでになかった。

天才にだって誤算はあるさ。

あわわ軍師、はわわ軍師だって間違えたりするし。

カスミ種は胸がゆさゆさしてて素敵！！なんだが霞んとこのモンス

ターだった気がする。

トリースタ・シエスチナでもいいんだけどあだ名としては無駄になげえし。

カスミ種 社 霞でよくね、銀髪だしみたいな。

武ちゃんはノーセンキューです。

この世界にはいません。

非友好的な宇宙人と戦っててください。

俺は友好的な宇宙人と飯食うから。

いや、待てよ。

俺と武ちゃんが異世界スケールで香月理論を挿げ替えて入れ替われば生身でハイヴ突入 勝利 ハーレム……！！！！

代われ！！

今すぐ代われ！！

はりーはりー！！

俺は、モテたいんだよお！！

くそっ、なんのための魔法なんだ……。

俺は、無力だ……。

困っている人類を、可愛いおにゃによこを、助けられないなんて！！

とりあえず上位ランクの記事で落ち着く。

S級でも四大会の一角を落としたタナトスが冬眠に入ったことで騒ぎになってるとか。

ブリーダーであるゲド氏はゲルニカの調整のためと言っているが詳細は不明。

マジか。

まさかオッサンの名前がゲドだなんて。
マジでゲイヴン。

大陸対抗戦は泊まり込みっぱいのだ。

入場 開会式 偉い人の言葉 D Sの試合

翌日、タッグマッチをD Sの試合やって勝った方の協会にオリジ
ナルコインが送られてから閉会式 解散

まあ、いーんだけどさ。

いーんだけど、3日前に現地集合。

場所は相手の協会の会場。

めっちゃ遠いのだ。

家紋持ちなら輸送用のドラゴンくらい持つてるかもしれないけどい
ない人だっているわけだ。

あ、俺には関係ない話でしたね。

でも、3日前とか無いわ。

遅刻しそうなやつとか問題起こす奴がいるから監視目的だそうです。
まったく。

迷惑なやつがいたもんだ。

他人の事をちゃんと考えろっての。

他人というか俺。

俺オンリー。

俺に迷惑かけなければ何してもいいぜ。

ドミナントとイレギュラーを気絶させた俺は爽やかに茶を啜るときどき来る手紙を読むのが楽しみです。
手紙が2枚。

二人とも対抗戦に出る先輩である。

1枚は公さんから。

ハムさんでもいいけど、先輩なのでハム先輩と呼んでいる。公さんって感じもするんだよね、ハム的に考えて。

内容はガンダムの事と近況の事。

先輩はなぜか助手をガンダムと呼ぶ。

昔は俺もガンダムだった。

あれ、なんか意味深じゃね？

刹那・F・セイエイ……昔は俺もガンダムだった。

そして俺にはわかる。

貴様はガンダムではない！！みたいな。

なぜ否定したかはわからん。

まあ、ほら。

俺があの世界にいたらそんな役回りなんじゃねえのってこと。

話は逸れたが、今のガンダムは実にガンダムらしいとか。

その点は俺も同意するわ。

任務を遂行するって言いながら餌とかやるし、個性的な後輩だと思う。

あだ名は刹那だが基本的にはせつちゃん。

貴様が桜咲刹那でなくて良かったな……そのときはせつちゃんウィングだったぞ。

ノウマンが、なぜ私のあだ名とそれほどまでに違うのだ、バンダナア！ってキレたけど仕方ないと思う。
だって大学卒業してからブリーダーを目指したオッサンとコルトくらしいの少年を同列にするのってムズクね？

また話が逸れたけど、とりあえずガンダムであるということだけわかってくれたはず。

本題はハム先輩が移動手段持たないことだ。
家紋持ちだが落ち目であったので特殊派生のモンスターを冬眠させてヘンガー族を育ててた。

ハム先輩がめっちゃ挽回してるので大丈夫じゃねえのって言ってもフラッグでSを超えると墓に誓ったらしい。

聞ける雰囲気ではなかったたのでそのまま流したがたぶん仲が良かった相手なのだろう。

でも、移動用のドラゴンの話で地雷踏むとは思わなかった。
つうか育てるってわけじゃないんだけど。

いや、維持費は凄いと思うけど問題無さそうではある。
でもヘンガーにフラッグってどうなのよ。

で、自分が助手を務めた先輩に連れて行かれることになったので助けてくれたってことだった。

無理。

もう1枚はエヴァ先輩から。

おまえ初めて行くんだらうから案内してやるよって話だった。

ハム先輩が俺を生贄にしようとしてると予想。

俺は大丈夫、大丈夫。
ダイジョーブだよ。

素直じゃないが面倒見もいいので好感を持つが、先生や先輩が助手したってよく聞くんだけどマジで何歳だし。

あのロリようじよマジで何歳だし。

俺の母校はみんな不老な気がする。

がくちよーもヤバイ。

ノウマンにわけてやったほうがいいと思う。

あとバルバトスにも。

モンスターは確かジョーカー族のスプラッター種。

特殊派生って数少ないのに種って付けるのは正しいのだろうか。

家紋は持ってない。

俺の騒ぎに乗じて円盤石のオリジナルを奪ったとかなんとか、昔に言ってた。

先輩エ……。

名前はチャチャゼロ。

先輩エ……。

ドラゴン族のギドラスを移動用に使ってるけど名前はもちろんチャチャマル。

先輩エ……。

ちなみにギドラスはドラゴン×メタルナーの合体。

水をメタルナー力に変える力を持つ、たぶん。

見た目はあれだ、メカキングギドラのメカの部分に似てる。
たぶん。

そんな感じの日から次の週。
久しぶりにヨウカンを作る。

羊羹である。

甘いアンコのやつ。

煮詰めてゝな和菓子。

チートの俺は料理の再現だって余裕なのだ。

街で似た食い物探すのがめっちゃツライのは秘密。

男は無駄口を叩かないらしい。

いや、俺だったあんまり言葉をしゃべる方じゃないからね。

なぜ羊羹かって？

超必要な超絶アイテムだからだし。

待機状態でふよふよと浮遊しているフラッグに乗りながらハム先輩
が参上。

会いたかった、会いたかったぞ！少年っ！！

そしてフラッグがバトルモード。

やはり私と君は、運命の赤い糸で結ばれていたようだな。

そうだ、戦う運命にあった！！とか言いながらフラッグのレーザー
ブレードが輝く。

なにコイツ、超めんどくせえ。
相手をするべきかと悩んでると見た目がマジやべえジョーカーが現れて斬り合いを始めた。
ふあっははははははははははなんて高笑いとともにチャチャマルに乗った幼女先輩が出現。

呆気に取られているリオを連れて荷物をイレギュラーの背に乗せる。乗せ終わって様子を見に行くとなぜかハム先輩は正座させられながらエヴァ先輩に説教されてた。
頭が上がらないらしくて凄くシニール。

あれは長くなる。

俺の経験から推測されるこの予想は絶対だ。
めっちゃ怒られまくった俺が言うのだから間違いないのだ。
リオと茶でも啜って待つことにする。

え、ロードランナー連れてくの？
重くね？

あ、走らせるんですか。

Y A M E R O
どんでんだけ遠いかわかってるのだろうか。
マジでやめたげてー！！ってなるから。

あとはカララギマンゴーとか持つてくのでイレギュラーに積む。
たぶん、あっちでも売ってると思うけどね。
モンスターにおやつとしてあげたりするブリーダーもいるけど、俺

は自分で食う。

2個で15くらいが相場。

100円で2個とかお手頃。

大好きです。

安いからか知らないけどレッドにちょっと酸っぱいと言われてしまったが俺は大好きです。

思い出のカララギマンゴー。

この世界での初めての善意はカララギマンゴー。

だから、俺の優しさはカララギマンゴーで好物もカララギマンゴーなのだ。

ブルジョアが自ら食べるのは1Gのカララギマンゴー……ちっ。
相変わらず意味不明である。

え、ゲームでは60G？

そりゃあ、モンスターだからいっぱい食うじゃん？

しかもブリーダーって高級志向だから高めの買出し。

一週間ぶんの目安が60Gとか。

シヨップが悪徳に見えてくるぜ。

お手頃で中堅にも人気！！

……学が無くて物価とかよくわからんから困る。

エヴァ先輩が俺を正座させて茶を淹れてる。

遠いからうつんたらかんたら。

長い話は聞き流すに限る。

いいからもつ行くつぜ……。

追伸

宇宙人にも沢山の種類がいるらしい。

攻撃的だったり、友好的だったりする。

見たこともない星人を連れ去って解剖する星人もいるらしい。

この世界が宇宙に進出するのはもっとずっと先だって言ってた。

モンスターを中心に回っている世界なので、そういった方向の技術

が全く進んでいないのだから。

確かに、馬車とかあるしなあ。

車なんて映画で見たことしか無いような古いへんなやつ。

乗り心地悪そう。

写真やテレビ、ラジオもあるのに偏りが半端ねえ。

冷蔵庫？

冬眠の技術ですさまじい性能だし。

まあ、とりあえずの話だが今宇宙にいる俺は未来を先取りしている
ようだ。

おれとせんぱいがた（後書き）

ピクシーが現実にはいないなんて嘘だ！！

主人公を変身っ！！てさせたいけどこれってモンスターファームなのよね。

おれとハム先輩とエヴァ先輩（前書き）

前回と今回はやる気出なかったです。

次かその次あたりからクソみたいな文章がさらにクソ化します。

俺そついうの耐性あるからって人やフンコロガシな方以外は注意してください。

おれとハム先輩とエヴァ先輩

俺は昔モンスターハンターをしていた。
この世界で。

何もわからないのに送られるとか反則すぎる。

俺が怒ったらカリカリピーすんぞ、この世界で。

努力系オリ主が憧れるほどのチートな筋力と魔力。

フラグは立てらんねえけどな。

赤い兄貴に匹敵するブラウニーレベル。

というか超えてる。

間違いなく超えてる。

これでカリカリピーである。

孤高のカリピストはモンスターファームで笛を吹く。

馬鹿か。

あれ、このチートスペックなら英霊召喚されるんじゃないやねえの。

ステ全部EXだろうけど、謙虚な俺はAでもいいぜ。

運はDカナー

来るっ！！

間違いなく、来るっ！！

俺の時代が来る！！これで勝つる！！

早くアカイアクマはバンダナノアクマを召喚すべきそつすべき。

英霊には特殊スキルとかあったよね。

アクマイト光線とかどうだろう。

相手は死ぬ。

完璧だ。

武器はエクスカリバーだな。

エスコンのレーザー兵器。

でかさは1km、射程は1200kmのあれである。

そこは俺の射程だけ、騎士王！！とかやってみたい。

冬木全体へ攻撃できるけどな。

あの建造物が見えるか？ あれが俺の武器だよ 止めなければ人が死につづけるぞ、セイギノミカタア！！

つてね。

まさにやられ役。

宝具……バンダナでいいか。

俺の宝物だし。

あ、召喚はやっぱなしで。

前に巻いてたポロキレだったら良かったけどバンダナ装備の俺は無しな。

ポロキレ装備はひどく中二仕様（笑）だけどネー

名人になって帰宅許可もらって幸せに過ごしてからならいいぜ。

あ、そうそう。

修行期間というか自分を見つめ直す時間の話だっけ？

ネギま系なんて基本的な修業期間は10〜600年だぜ？

ないわあ。

ネギまは茶々丸が好き。

ロリ版とかマジで萌える。

エヴァ先輩がエヴァンジェリンに似てるから期待したのに、俺のヒロインはギドラス。

これが世に聞く修正力ってやつか、オリ主も大変だな。

こんなフラグを折るために頑張ってるのか。

種族の垣根レベルって高すぎ。

やべえなオリ主。

まさに最終兵器オリ主である。

垣根って見ると、ていとくん思い出す。
ほら、あのイカ娘さんがいるアニメ。
イン…… インデックス？
索引とか誰だし。

リリカルな世界だって5年は固い。
デバイスを手に入れて、修行。

偶然、管理局員の親が…… って住む場所あつて親がいて、欲しいモノくれるとかマジで羨ましい。
ちなみに俺はすずかとツンデレ バーニング、ギンガが好きだ。
シグナムとかシャマルとかヴィータとか初代リインフォースとかも好きである。

タヌキは微妙。
イヌはオリ主でも掘ってる。

ハーレムとかマジで羨ましいから嫉妬してるわけじゃねえから。
ただ…… そう、BLが見たいだけだし。
嘘です。

ストライカーズはあれだな、オリ主がなのはさん止めすぎ。
逆にオリ主もティアナに追撃かけてしめておけばなのはさんに逆らわないっすよ。

話はオリ主先輩が頑張れば大丈夫っす。
ふはははははははははは

これでまたハーレムになりかけの憎き敵を修正力で葬り去ることが出来る。
嘘です。

俺が主役ならユーノとエリオが幼馴染と後輩ポジできょーやとかげ

ツフィーが先輩、なのはパパとかゲンヤさんが先生だと思う。
思いは君に、息子は尻に、勇気の魔法はやらないか
ビーエルなのは、はじまります

嘘です。

恋姫とかすでに剣道やってたりするし、将棋強かったりするし。

雛里くれ。

あの娘超欲しい。

あさはおかずを一緒につついて、よるはオカズにしてつくんでしよう。

なんかゴメンネー

あとは皆好きだし。

つつか美女・美少女嫌いなやつとかいんのかねえ。

代わってくれ、ち この御使い。

俺とすぐに。

詠ちゃん、俺だ 結婚してくれ!!

そしたら反董卓の連中に向けてメギドラオンぶちこんでやるよ。

全員ロツクオンしてドカンと一発メギドラオン。

全員死ねば狙う奴もおるまい……ふははははははははあ。

……妖術使いとかにされて嫌われそうだからやっぱいいです。

この世界だと皆寛容だから気にしないで魔法バンバン使えるしー

モンスターが中心の世界でチートとか持っても普通のことには役に立たねえし。

勇者はないし、魔王もない。

国がモンスターに乗っ取られてたらドラクエ3風に助けてやるのに。
喰らえ、ミラーメギドラオン!! ってね

鏡のいみねえわ。

まあ、そんな感じのこの世界での初めの方。
あれだ。

ゲーム買ってきて初めから選んだくらいのいきなりレベルである。
チュートリアルも無し。

金なんて無い。

知り合いも無い。

飯食いてえけど仕事は無いし、学も無い。

無い無い尽くしである。

そんな中で知り合いが出来たり、出来なかったり。

マジカララギマンゴーうめえ。

あの時はガチで泣いた。

で、そんな状態での初めての狩りはめっちゃドキドキする。

チートだから死なないとか、大丈夫とか、甘くみてたけどあの緊張
感洒落にならない。

初心者がその場をグルグル回るとかそういうレベルじゃない。

魔法の使いかたも知らなかったから、無理ゲーだと思った。

ジョインジョイン、トキイ！！くらいの無理ゲー。

でもノラモンの賞金の魅力ってそんな不可能を超えるものなんだわ。
今ではなんであろうと気にならないから人間ってこわいな。

何が言いたいかっていうと苦労したのにピンハネした協会の勝ち負
けなんてどうでもいいってこと。

あれのせいでメギドラオンの丘が出来たんだから俺に謝罪すべき。

魔力だってタダじゃねえんだよ、死人出なくて整地が出来たんだか
ら金寄せ。

そして賞金を返すべき。

じゃなきゃ牛乳拭いた雑巾を机の中につっこんでやるYO

でも折角1のモンスターが見れるんだからよし、俺がんばっちゃ

うぞーって気分。

参加賞とか出るけどドミナントが負けるとかありえん（笑）
しょうがないから勝つとしますか。

べ、べつに協会のためってわけじゃないんだからねっ！！

まあ、エヴァ先輩と知り合いになれたっただけで良しとしておこう。
でも俺を監禁した奴はマジで呪う。

VHS召喚してリング1週間チャレンジに挑戦してもらおう。

……そんなことできねえけど。

メギドラオンで吹っ飛んだやつは許してやるけど、まだのやつはそのうちナニカスル。

あ、そういえば貞子の萌えキャラが流行ったじゃん。

呪まーすってやつ。

俺はあの貧乳で幸薄な感じが大好きです。

今の俺なら貞子に呪われてもちゅっちゅ出来るね、サイキョーだから。

貞子、俺だ 呪ってくれ！！

今は凄くでかい河を超えてるところ。

え、河じゃなくて海なの。

へー、ふーん。

今は凄くでかい海を……海って普通にでかいよね。

あー、なんて言うか。

今は海を渡ってます、でいいか。

この海に沿って飛んで行っても結局海しかないんだとき。

向こうとこつちは別の大陸だから当たり前なんだけどね。

ブリーダーだと身分証明とか無くて楽だね

マジ特権階級すぎて楽。

これはゼロ魔の魔法くらい反則。

オキゾクサマ気分になれるね、ホント。

俺が魔王討伐する勇者なファンタジー世界だったらここで襲撃されるけどそんなことなかったぜ。

亡き者にして不戦勝とか狡いやつがいないかなとも思ったがそんなことは無かった。

……そういう発想するのは俺だけか。

まあ、名誉が云々だしね。

戦うことが大事ってことか、ふえー！

俺は勝つことが大事だと思うから半分くらい賛成はしてやるよ。

ドミナントいなかったら闇討ちしてたと思うから敵もよかったな。

せっちゃんてどうやってこの海を渡るのだろうって思いながら眺めてると島が見えた。

小さい島。

島というか岩。

岩としてはでかい。

俺の頭では表現できないからどうしようもないね。

あれは空のレースの一つで使っらしい。
ディープ・ブルーって名前の大会。
空なのに海に潜んのか、と。
海のレースのやつらは泣きたくなるはず。
レースでも不人気なのに、空に食われてる感が否めない。

俺もやる事が無くなって脳内で一方通行をセクシーコマンドーで
倒し始めたころに宿に着いた。
かみじょーはあれだ。
パンチでいいわ。
魔法効くのかわかんねえし、ガチでパンチすれば逝ける。
でもあの右手って死亡フラグも消すんだろ。
しかも主人公パワーで真の力まで……どこの魔王だし。
勝てねえ。

あ、黒子に負けるわ。
テレポで首にカード通されたら流石に負ける。
回復魔法使えないし。
こええ、ババアヴォイス超こえー！

天使に勝てんのかな、俺。
神は天使よりも強いだろうけど神の力で与えられた俺の能力が勝て
るとは限らないわけで。
試す機会ないけどねー

3か月前くらいから街はお祭り騒ぎらしいよ。
ほら、オリンピッククするじゃん。

協会の。

国民に大人気だけあって凄いらしい、経済効果が。

あと人がいっぱい。

モンスターもいっぱい。

人とモンスターで溢れかえってる。

疲れたので俺は寝るのだ。

明日にでも観光する。

さあ、寝るぞー！って感じでベッドにダイブ。

シャーマンキングって微妙だった。

ロボットとゴーレムのバトル、メイデンだけは評価する。

追伸

街で流れ星を見かけたら俺だから。

俺オンリーで大気圏突入するときだから。

ノーロープバンジー。

クラウンには悪いけど俺には大気圏に突入できる性能が備わっているのである。

俺を恨むな、シャアを恨むんだな。

しかし魔力つてのは凄い。

頑張れば空を飛べるからな。

ほとんどの事は魔力ですつて言えばおkである。

念話風に声を飛ばしたりも魔力のおかげです。

ミノフスキー粒子くらい非常識。

ネギ先生がシヨタなのにドラゴンボールっぽいのも魔力のおかげです。

時間を云々も魔力のおかげなのです。

【わたしとともに魔力を操る簡単なお仕事をしてみませんか？】

求人条件：魔力を感じ取れ、かつ簡単な魔法が使える

仕事内容：魔力を扱うオリ主として世界を変える

報酬：異世界での経験、プライスレス

おれとハム先輩とエヴァ先輩（後書き）

モンスターファームというゲームをご存知でしょうか。

CDからモンスターを再生して、それを寿命と言ったりリミットの中で育成して強くするというゲームです。

ゲーム内ではモンスターについて様々なストーリーがあります。

アイテムを合体の素材に使うだけのモンスターから長い年月をかけて条件をクリアする必要があるモンスターまで。

それなのににんげ

書くのダルくなったんで端折ります。

つまりゲームはモンスター中心なんでこれは人間を中心にしたいたいと思ってましたが、思った結果がこれだよ！！！！

そろそろ主人公の名前とか出してガッツリ行きましょう。

そのための対抗戦です。

まさにレッドさんの物語の出発点に相應しい。

おれとあいつ（前書き）

モンスターなんてこの二次創作にはいなかった。

そうだろ？

おれとあいつ

オレ主はチートで出来ている

調子に乗って

やる気を無くす

幾たびの謹慎を越えて補習

ただ一度の病欠もなく、

ただ一度の皆勤もなし

オレ主は教室で一人、

黒い鉛筆で文字を書く

ならば、俺の実技に意味は不要

この成績は、筆記だけで出来ていた

そんな学生生活だった。

何やっても謹慎だった。

良いことでも悪いことでも、何かすれば謹慎だった。

それでも退学にならなかつたのはエヴァ先輩とがくちよー、数人の先生のおかげだった。

同期の友達にも心配かけた気がする。

迷惑かけたとも思うけど、単純にうれしかった。

この世界で頼ってもいい人がいるってことが。

ただ、うれしかった。

マジでやることないからね。

3日前とかマジふざけんな。

むしろ、ふざきんな。

……ふざきんな。

いいぞ、ふざきんな。

なんか語呂がいいぞ、ふざきんな。

声に出したくなる。

俺らの大陸からスタープーンとか売りにきてる屋台もあるらしい。スタープーンってのは食ったら人気が上がりやすくなるとか。

実際、食い物で人気上がるとか眉唾すぎるが名前を気にする家紋持ちとか家名持ちが買ってるのだからとか。甘いから俺も好きだけどね。

他にも　グミみたいのも売ってる。

こっちの大陸には珍しいっぽいな。

ドミナントを連れて歩くと目立ってしょうがない。
食い歩きしてて混んでいても人が左右にわかれて道が開けていく。
超楽。

注目されるのは有名税にしとく。

チラッ ってやったら泡吹いて倒れたからとかじゃねえから。

そんなんじゃないからねえから。

……ごめん、あっちで騒ぎになってるの俺のせいだわ。

ゲイヴンのおっさんが爽やかにコーヒーを飲んでたけど無視する。

誰が嬉しくて野郎と茶を飲むかよ。

リオはエヴァ先輩と買い物に行ってしまった。

ハム先輩はせっちゃんとなんかやってんじゃないかねえの。

興味ねえからどうでもいいや。

マジやることねえよ、マジで。

マジで暇人のマジンはマジックを真面目に交えながらマジンのマジ
シャンとしてマジになった。

……簡単か。

街中でドミナントやイレギュラーと遊ぶと人がいっぱい死ぬだろう
から何もできん。

一般人に紛れて生活しているベジータの気分かもしれない。

俺の右手がうずいてやがる……！！

むしろ全身が、である。

コンセントレイトの後に全体魔法使って街を火の海にしてえ。

俺の嫌いな協会のやつらもみんな死んでくれないかな。
……なんてね。

エヴァ先輩とかリオとかハム先輩を巻き込むのはなしだな。
ゲイヴンはまあ、いいんじゃないかな。

なんで魔王とかいねえのかな。
アニメ版みたくムーとか現れたら俺も大活躍なのに。
ムーってゲームで再生するとめっちゃ弱い。
誰だよ、ALL999とか言い出したの。
ピークロンと同じ成長適正だぞ。

ピークロンてカブトムシっぽいあいっだぞ、あいっ。
フェイトでいうアンリマユが実はカブトムシスペックだったのと同じ意味をモンスターフォームでは持つのだ。
最弱サーヴァントだとしてもそれは無くな？
人間にやられるかもしれないけどそれはねえよ。
冗談だが。

でも、気付いた時のガツカリ感は異常。
超悪モンのピークロンとか育てにくくてしょうがない。
極悪モンなピークロンとか価値あんのかよ……。

名人位のパブス先生とやらが激励に現れた。
顔こええええ。

ヒゲの威圧感パねえ。

俺の顔より怖い。

なのに人気。
マジぶざきんな。

え、今？

誰もいないですよ。

先輩方は出かけたし、ゲイヴンのオッサンもモンスターを見に行っ
たし。

え、レッド？

いたのか、知らなかった。

毎度のことながら協調性が無い奴ばかり代表になるって愚痴られて
も困る。

外面だけ気にしてるやつには才能あっても活かせないってことなん
じゃねえの。

勝てばいいんだよ、勝てば。

好きにさせてくださいあ。

帰る？

あ、はい。

おつかれっす。

あ、はい、頑張ります。

偉い人に頑張れって言われたの久しぶりかもしれん。

がくちよーとかエヴァ先輩以外は聖人君子みてえなバファリン以上
の優しさでできてる先生しか応援してくれたことねえし。

あれは人気出る。

うん、しかたないね。

強面でいい人とかギャップパネエよ。

ピクシーから手紙きた。

マジすげえな、こいつ。

俺の泊まってる宿宛てに手紙出すとかすげえ。

レースあるからいけない、ごめんね　みたいな内容。

優勝したら許すって書いてくか。

でもコイツなら絶対優勝する。

俺が言うんだからまちがいねえわ。

つつかこれってレース後に届くんじゃねえの。

なら最後に優勝おめ　って書いておくか。

完璧である。

おまえのこと超理解してるからー、超信頼してるからー、である。

手紙出してくるか。

アテイ先生がいた。

超困ってる。

人々も困ってる。

こんな混んでるのにナンパとか頭沸いてやがるのでデビルスマイル。

相手は恐怖状態になった途端に逃げていった。

亡者の嘆き使わせるよ。

皆死ぬぞ、ふあっはははははは……はあ。

アテイ先生。

レックス先生とは赤髪な美形双子である。

究極の双子だと思う。

ツインズ・リーサルウェポン。

恩師の一人。

実技からふつーの授業まで幅広く行える万能ちよーじん。

しかも双子とも性格は聖人君子。

優しさはバファリンを軽々と超える。

で鈍感。

双子がともに鈍感だから浮いた話とか聞いたことねえ。

基本はレックスせんせーが実技、アテイせんせーが授業だった。

補習も先生から受けた。

この双子の両方と補習とか贅沢すぎるけど、疲れる。

先生奇遇ですね、結婚しましょう。

なんてね

いいおっぱいである。

素晴らしい足である。

舐めたいくらい白い肌である。

年の差が……とか赤くなりながら言ってる先生マジ萌える。

ほわほわである。

一度怒らせて白くなった先生はめっちゃ怖い。

抜剣覚醒とか反則である。

間違いなく最強。

ギャグ補正も掛かってたから俺は一生勝てねえ。

秀囲気がほわほわである。

それに加えてほわほわな赤い長い髪に乗せた白い帽子が、無敵である。

しかも鈍感で天然。

授業時にはメガネ装備。

勘違いする男子生徒が後を絶たない気がする。

先生に声をかけて正気に戻ってもらおう。

回りくどい告白とかは気付かなかつたり天然要塞に阻まれたりするの
に意味不明なくらいの直球には弱いらしい。

タッグマツチまで超暇だから見て回ってたとか。

まあ、暇だよな。

俺らの次の日だろ。

来るの明日でも良かったんじゃないかねえの。

片割れのレックス先生とかツンデレのベルフラウとかアリーゼはモ
ンスターの様子見。

そのうち戻ってくるらしい。

ツンデレがそろそろ戻ってくるらしいので俺の癒しタイムは終了。

眼福だった。

ほわほわな笑顔におっぱい。

ほわほわな笑顔にふともも。

ほわほわな笑顔に……ふう。

とりあえず素晴らしかった。

超結婚してえ。

ピクシーに手紙を出す予定があるので俺はこれですて別れようとし
た時の先生の目は生温かった。

わかってますよって目をしてた。

ほわほわである。

凄く可愛いくてほわほわで癒されたが最後に凄く背中が痒くなった。

なぜだし。

手紙を出してたらだらしてると物凄い騒ぎになった。

モンスターが野外で乱闘してる。
あぶねーからブフダインで頭を冷やしてやろうと思って観衆の頭上を飛び越えて一番前まで行く。
ブリーダー同士の争いらしい。
この前の乱闘なんて俺だけが謹慎だぜ。
ストレス溜まるわあ。
マジでねえわ。

話は戻るが片方はどう見てもゴロツキである。
モンスターはモノリス、渋いぜ。
寿命が短くて育てにくいだね、技は結構いいけど。
もう片方は輝く情熱を秘めたキラキラ目で後ろに少女を庇ってる。
モンスターはデイノ……デイノだ！！

デイノはやばい。
初めて育てたモンスターだから思い出深い。
全部平均的なんだけどそれがまたいい。
ゲームやりたてでよくわからなかったからすなかけされまくって泣いた。

かみつくが予想以上に使えて喜んだのは今でも覚えてる。
結局、休息とか大会とかの理解が少なかったのでグレードはBどまりだった。
ドラゴンに負けたときは小学生ながらに男泣きした。
遠距離のプレスが卑怯だって騒いだ気がする。
それまで自分も笑いながら敵のレンジ外から攻撃してたくせに。

次に育てたのはガリニクス。
背が金色に輝いて綺麗だった。
修行とかも適当にやりながら育ててたけどホントに楽しかった。
時間を忘れるってのはああいふことを言うのだと思う。

Sまで到達したんだけどガリ系の炎の壁で即死。
泣いた。

泣きながらリセットした。

修行出したら炎の体当たり覚えて超喜んだ。

けど次の週で死んだ。

泣きながらリセットした。

結局、俺が名人になってエンディングを見れたのはメロンボだった。
その前にも数々のモンスターが俺の元を離れていった。

今見るとポリゴンもしょぼいけど、それでもおもしろい。

素晴らしい思い出のゲームだ。

……ふう。

ちよっと思い出に浸ってたらいつの間にかストリートファイトが終
わってた。

なんか熱く語って、それに感化されたゴロツキが涙を流しながら握
手。

なるほど、わかった。

あの情熱の瞳を持つあいつは主人公なんだな。

あだ名をあげたいところだけど思いつかねえ。

キラが一番いいけど、もういるし。

スザクは違う、多分。

うざい主人公が思いつかねえ。

くそっ……俺のメモリーよ、輝け！！

思い浮かばねえわ。

しゅじんこーでいいや。

ああああああよりはマシだろうよ。

感動の場面なんだけど戦いが激しすぎたのか、店の看板が取れ掛か
ってるけど誰も気づかねえ。

丁度、適当に空を飛んでいたドミナントが帰って来たので指示を出

す。

助けるドミナント、落下する看板。

……空気を壊してしまった。

やべえ。

さすがの俺も空気は気にするので去ることにする。

良いモノを見せてもらった。と、しゅじんこーに声をかけてからドミナントに乗って逃げる。

ニヤリ笑いも忘れないぜ。

これをすればとりあえず考えなしだったりその場凌ぎであつても意味がありそうに見えるだろ？

重宝してます。

というかエヴァ先輩から感染したただけだけだね。

まあ、良いデイノだった。

今の俺ならデイノ族全部いいモノだけだね

空気はそっちで構築してください。

俺はFIMBAのモンスター見て回るって暇つぶしを思いついたから忙しくなるんです。

リオを拾ってモンスター観光に行くしかねえわ。

あいつは知らないだろうし、珍しいのもいそうだからねー

追憶

何、見てんだよ　きたねえクソガキが

「ご、ごめんなさい……」

……なんなんだよ、ここ　なんで俺なんだよ

あ……

意味わかんねえよ、なんで俺なんだよ

あの……

なんもねえのにどうすんだよ、ただの学生だったんだぞ　ふざけんなよ……ふざけんなよふざけんけんなよふざけんなよ　どうすりやいんだよ……死ねばいいのかよ……死にたくねえよ……

あのう……

普通に暮らしてたんだぞ……学校行って、飯食って、馬鹿やったり、ゲームやったり……

あのっ……!

ああっ……!?　うるせえぞ……!

ひっ……

ちっ ……まだいたのかよ

あの……

なんか用かよ なんももってねえぞ……ホントになんも

ち、ちがいます そこ、私の家なんです……

ここが？ こんなゴミ溜めがか？

……

ちっ 隣座んのかよ……

……おにーさんだって、座ってるじゃないですか

あっ！！！？

すっすみません じめんなさい じめんなさい じめんなさい じめんなさい じめんなさい じめんなさい……

ちっ そんなに……

え？

なんでも、ねえよ……

……

……

……

腹、へった……

あの……

あ？

ごはん、いりますか？

……いらねえ つうかそんなもんねえだろうが

……ひとつしか、ないので半分こですけど

……いらねえよ

はい、どうぞ 少ない、ですけど

んだよ、これ

えっと……カララギ、マンゴーです わたしじゃ、がんばって

も一つしか……少なくって、ごめんなさい

そうじゃなくてだな……ちっ

……

……

……泣いて、るんですか？

……っ 泣いてねえっつうのー！ー！

……そう、ですか

……

……あの、ですね

……

……一緒に食べると、おいしいですね

……

……しめんなさい

……あやまんなっつうの

え？

あやまらなくていいってんだよ

は、はい……！ー！ー！

ちっ……

……

…

…

…

あの……っ

あ？

……私が、私が気持ち悪く、ないんですか？ バケモノって…
…

はあ？ ゴミ生活で頭でも沸いたか

違います！！ ほら、……羽が……は、生えてるじゃ、ない
ですか

あ？ てめえのボロキレみてえな服が破れてんってことかよ

そうじゃ、なくて……

そんなもん気になんねえよ……化け物とか言い出したら俺なんて火とが出んぞ

え？

氷だって出る、雷だって出る　人なんて紙屑みてえだよ、だから……

で、でも！！　でも、おにーさんは、ずるい……　見た目は、ふつうの人間じゃないですか……

じゃあ、俺もお前も半人前の化け物だろうよ　おまえは見た目、俺は中身

……なら二人で、一人前？

なんでそうなんだよ……

二人、二人かぁ……えへへ

……なんなんだよ、おまえ

おれとあいっ(後書き)

読み返すと誤字とかやべえ。

修正しようと思ってもどろだったか忘れるツルツルの脳みそが悔しい。

おれとレッド（前書き）

今回をぽぽぽーんと終わらせたので、安心して次回はレッドさんです。

ちよっとー、主役遅いよーなにやってんのー？って人はラピユタを探してれば時間なんてあつという間。

まあ、あれです。

主役は遅れてやってくる、みたいな。

おれとレッド

FIMBAのおひざ元だけあってテンション上がるよね、やっぱり。デイノがいつぱいだわ。

ロードランナーよりも多いよ、これ。

ちよつとした環境の違いで俺の方では育てられないんだけど、やっぱりいいよなあ。

ブリーダーはデイノに始まり、デイノで終わるって格言があるくらい有名だ。

すべてのモンスターはデイノから生まれたって話もあるくらいだ。ホントなのだろうか。

まあ、そのうちデイノを引退するようになるんだけどね。

色々なモンスターを育ててみたいって欲求があるわけですよ。育てれば愛着湧くからなんだっていいぜ。

でも不細工なモンスターは無理。

やっぱりモンスターが少しばかり違うのが印象的だ。

あっちとこっちではモンスターの生活も違うのが影響してるのだろう。

1のみのモンスターであるマジンやラクガキ、貧弱なディスクも見ておきたかった。

こっちだとプラント族がめちゃくちゃ強かった気がする。

ゲームだと1が育てやすかったから2では調整が入ったとかだろうけど、この世界の場合では気候の違いが如実に表れているとか。

へーって感じですね。

ナンゴクラクガキとか存在するからこっちのほづが日差しが強かったりするのかもしれないね。
いや、わからんけど。

ガリがふよふよしてた。

あれはいいモンスターだ。

性格が良いモンだから言うことを聞いてくれて育てやすかった気がする。

技が使い込みとか必要で微妙だったけどエフェクトはカッコいいから好きだ。

攻撃をスタンドに任せてるようなモンスター。

ただしスタンドは身体の中から出る。

リオにガリでも勧めようかと思ったが可愛くねえから止めておく。

ナーガはステ微妙だし短命だからムズいし、でも技がいいだよな。

威力とか。

可愛くねえわ。

普通にニヤーとかでいいか。

あ、でもノウマンと被る。

あいつなんでニヤー族育ててるんだし。

ワン種。

ニヤー×ライガーの犬っぽいやつ。

名前はアヌビス。

名前負けしてっから。

異世界のデルフィがきつと泣いてるぜ。

なんつうの。

もう、飽きてきた。

ホリイもいねえし、ディノも見終わってたからマジでやることねえから。

飯は洋食っぽいので食べにくくてイライラする。

ナイフ、フォーク、スプーン。

俺の敵だろ、こいつら。

俺の家は箸なんだよ、箸。

うわ、箸持って来ればよかったし。

育ちがよくねえ俺はマナーなんてわかんねえから使いにくくてしょうがない。

まあ、チート能力が完璧な動作を俺にお届け。

ストレスで皿にぶつけてカチャって音をたてただけでエヴァ先輩に叩かれる。

マジでストレス溜まる。

なんで皆使うのうめえんだし。

つつか様になつて俺だけ浮いてる。

まさかのゲイヴンにまで負けるとか俺やべえ。

部屋で一人モソモソと屋台の食い物でも食つかなあ。

行儀よくお上品に食うとか俺に完全に合って無いから。

おかわり無しとか意味がわかんねえし。

腹いっぱい食べることが幸せだと思ってる俺とこの宿では考えが全く違うらしい。

協会が俺に仕向けた刺客に違いない。

もうね、味が全くわかんね。

いい宿だけどこんなぶるじょあじーなのはやめて欲しい。

俺ってば似非紳士だから。

静かな飯って嫌いなんだわ。

なんで皆で食うのに無口なのって感じである。

こんな場所にいられるか、俺はドミナントと食うぞ！ってやるうとしたけどエヴァ先輩には逆らえねえ。

さっさともってこいよ。

なんでトロトロと一品ずつ持ってくるんだし。

まさか厨房に入り込んで全部食うフラグか？

やめてよね、俺が本気出したら厨房なんて敵う訳ないじゃないか。みたいな。

こんな食事してアンタたちは何が楽しいって言うんだー！！
みたいな。

あ？

なにみてんだ？

協会の豚どもにメギドラオンすんぞ。

俺のメギドラオンは豚どもにとってきつと格別だろうよ。
きつと昇天するわ。

あのクソ豚どもが地獄行きなのは確定的に明らかだろうけど。

隅っこで孤独にオレンジジュース。

オレンジがるのかって？

あるよ。

普通にある。

あとは名前が違っただけで味は日本のに似た食い物もあるし、ヨウカ
ンもそんな感じ。

ソナバナナとかあんじゃん。

ほら、バナナが存在してるって証拠ってわけでもねえけどバナナに似たモノはあることがわかるだろ。

つまり、どういうことなんだってばよ。

まあ、ヨウカンもある。

ヨーカンとかそんな感じだった気がする。

ヤマトとかそんな感じの国だ。

日本っぽいところ。

めっちゃ遠いから品々も高え。

俺が作ってたりするのだ、箸とか茶碗とか、いろいろ。

ビンボーには買ってる余裕なんてなかったのだ。

畳とか死ぬほど感動した。

あれはヤバいね。

あと米。

米マジうまい。

エヴァ先輩のところで食ったのがこっちでの初めてだった気がする。

あとはジャガもどきとか食ってた。

安くて腹が膨れるとかサイコーです。

今では見たくもありません。

なんて考えながらオレンジジュース。

オレは一人、部屋の隅でオレンジジュース。

コーヒーと紅茶しかねえとかおしゃれすぎてぶち壊したい。

俺の優雅なティータイムが爆破された気分。

こっちに来てからいいことねえわ。

アティ先生のほわほわしかいいことなかったわ。

ストレスがマツハ。

コルトが睨んでんだけど、俺が何かしたかよ。

コルトと言えはあいつがいねえわ。
レッド。

宿に着いてるって聞いたから部屋にでも籠ってんじゃねえの。
羨ましい。

俺は信頼が無いらしいから偉い豚どものためにここにいないといけ
ないらしい。

マジで畜生のために頑張る俺とか健気すぎ。

あ、イライラしてきた……屠殺すんぞ、豚ども。
なんてね

ふはっはははっははは

泡吹いて倒れてやんの。

いい気味だし。

俺をハブにして楽しんでるからだ。

ストレスで寿命削れて死ね。

ライフの2倍ダメージで即死させてやんよ。

……なんてね

というわけでね、ベルフラウと隣り合ってオレンジジュース。
なぜだし。

ツンデレとか別にいらねえから。

ツンベルはレックスせんせーに片思いでもしてるよ。

最後はアリーゼに負けると見た。

まあ、気にすんな。

相手が悪かったよ、うん。

このちんまい少女のあだ名はベルフラウ。
名前は……うん、きつといい名前だと思うよ。

俺の同期でブリーダー育成の専門学校に通っていた。
試験に受かればこいつのように少し幼いんじゃないかなって思うようなやつからノウマンとかバルバトスみてえに何しに来たのおまえら、世界滅ぼしたり英雄殺したりしろよって感じのやつらまで様々である。がくちよー的にもイロモノが最も多かったんじゃないかな、俺の同期って。

そんな奴らを抑えてた先生とかマジ憧れる。

ギルガメツシュすらアテイ先生に止められた。

抜剣覚醒には勝てねえわ、しょうがない。

イメージ的にはギルガメツシュがエヌマ・エリシュして調子に乗ってたならUBWの剣が全部真名解放したぐらいの力の差だった。

それでもわかんないって？

無人機から敵の機体までKARASAWA無限撃ちで弾幕ゲーみたいな状態だ。

ばっか言わせんなよ、恥ずかしい／＼

あとはインベーターで、もこたんと弾幕ゲーするくらいカナ-

ツンベルの話はまあまあ役に立った。

助手として活動してるやつや自立し始めたやつもいるらしい。

ギルガメツシュは知らねえって。

だよな、あいつ友達少ないし。

ツンベルとは相性最悪だしな。

そこなデコ、私の消しゴム拾え ああ？ぶちのめしますわよ金ぴかあー！ みたいな感じだった。

消しゴムとか超シユール。

結局拾うのはエルキドウ。

ギルガメツシユの家に仕えてるらしくてパシリみたいなやつだったからエルキドウにしたけどぴったりだった。

つつか学習机に座って勉強とか違和感がヤバかった。

いや、俺の同期ってみんな机とかノートとか似合わねえやつばっかだったけど。

助手してるのはアームストロングみたいな家族がブリーダーやってるし教わっておくわ、みたいなやつである。

他にも金いらさないからアナタの教えを受けさせてプリーズ みたいなやつも助手ってる。

そんな奇特なやつ少数だけど。

ゲームのコルトとかこれだな。

あいつ最初以外は働かねえんだよな、給料を遠回しに要求してるのか……？

ブリーダーとして独り立ちしたり、家を背負ったりしてるのもいる。レッドとか霞な。

ピクシーもこれに含まれるな、特殊派生的な進路だけど。

家名持ってて特殊派生持ってて金持ちで家紋持ってるやつら。

ピクシーは家名持ちだったな。

名前とか覚えてねえけど。

ピクシーは俺と同じく覇道を極めてるはず。

レース圧勝でこまっちゃうな　みたいなことを言うに違いない。
俺の相棒だからな。

綺麗に飛んで凄く速い
最強だわ。

つつか結構な賭け金をおまえに払ったから勝て。

まあ、負けるわけないだろうけど。

俺が言うんだから間違いねえ。

レッドと同じく霞もマジ静かな娘だった。

あと頭の髪飾りが動く。

どうなってるのかわかんねえけど凄え。

ウサミミもどきである。

感情表現乏しいかと思っただがあれで結構豊か。

なんか知らねえけど髪飾りに連動して髪がぴこぴこ。

超可愛い。

俺は霞判定名人級だからどんな気持ちかわかる。

つつか俺のキョウダイに似た奴がいるからなんとなくわかる。

それに類似キャラ(？)なレッドもいるから倍プッシュ。

俺がおまえらの理解者だからー！！みたいな気分。

……ぴこぴこ

え、ニンジンくれんの？

ぴこぴこ

超うれしんですけどー

ぴこぴこ、ぴこぴこ

みたいな感じだった。

ジャガもどき以外ならなんでも好きだし。

あの学生生活は楽しかった。

いいやつらばかりだよ、ホント。

んで、何やってるのかわからなかったり親のスネかじってたりするやつもいる。

アヌビス（笑）を育てている、らしいノウマン。どう考えても怪しい研究です。

キラさま（笑）はなんか正義の味方してきれいごとでも吐いてるんじゃないの。

無職で自立してねえくせに。

ピンク教にハマって今日も貢ぐ、貢ぐ、ミツグ君である。

ピンクと合わさるとめっちゃうるさい。

ついプチツとしたくなる、なんてね

バルバトスは旅して道場破り的なことをやってるに違いない。

英雄を倒しに別の大陸に行きそうだし。

今日も斧でモンスターを倒していると予想。

……外れてなさそうだから怖い。

ブリーダー歴1年目が新人ブリーダーに属するわけで。

俺らの時は 新人ブリーダー<俺ら くらいの人数だったし、俺もなぜか嫌われていたのでハム先輩に助手として回された。

そこでは俺もガンダムだった。

今年も 新人ブリーダー<後輩 だったのでアテイ先生とかレックス先生のほうにまで助手として進出。

つうか先生とこまだ見習いしてるやついんじゃない。

どんどん増えて モンスター<助手 になるんじゃない。

エヴァ先輩なんてあんまり助手とらないし、取っても1年で解雇。スパルタです。

俺も学校入る前に1年やってたけどきつかった。

レッドもいた。
帽子をあげたのもそれくらいだった気がする。

そして美少女（年齢不詳）の寝顔はサイコ でした。
あれはヤバイ。

神とか超嫌いだけど、神性とか絶対やべえことになってるけど嫌ってるのでBとかになってるけど、そのときは感謝した。
眼福でした。

白いからな、肌。

足とか長くてやべえ。

ロリコンになるわ、あれ。

うん、しょうがないね。

世のオリ主もあれにフラグ立てたくなるのはしかたない。

真祖？

素晴らしいじゃないか、究極の美が永遠に残るなど ふはっははは
っははは、みたいな感じ。

キティさん、結婚してくれ！！

なんてね

冗談である。

……でも綺麗だっと思ったのはホントだ。
身内には優しい、いい人だよ。

そんな感じでダラダラしてたら大会当日である。
宿の入り口に皆で集合。

大事なイベントだから正装である。

俺にスーツを装備。

マジで堅苦しい。

みんな正装。

エヴァ先輩、露出多いっす。

マジ眼福っす。

やべえことに気付いた。

俺は、一度も、レッドに………というかポワゾンに会って無い。

ガツデム!!

早く来いよおっおおおおお、レッドくううううん!!

ああ？

コルトのクセに俺を睨むとか嘗めてんのか。

コルトのクセになまいきだつてタイトルで俺を討伐するゲームにシフトすんぞ、おい。

ゲームバランスを著しく破壊した仕様となっているので注意が必要です。

スケイスが3体同時にカイトのパーティに襲い掛かるくらい無理ゲー。

完全にデータドレイン祭りです、諦めてノーマルの難易度でやり直すべき。

とか考えてたらコルトが何か言ってたのを聞き流したでござる。

えー、何この空気。

俺のせい？

なんかコルトも泣き出すし。

しかたないな。

最終兵器『リーサルウェポン』を使うときがきたようだ。

俺のおやつだったんだが。

カララギマンゴーをコルトにプレゼント。

なんか違ったらしい。
レッドが来ないから云々とか。
尚更カララギマンゴーの出番じゃないか。
あいつも好物には弱いはず。
ドアの前でゆらゆらとされたら出てこざるをえない。
そして気ますぐりながら登場。
気分は風邪で長期の休みをとった小学生。

なに疑ってんだし。
いいから行けよチビ。

名前ですら呼ぶ気が失せてきた。
こいつのせいで昔、俺はヘンガールのピークを間違えて育成失敗の憂
き目に。

早く行けって。
俺からのカララギマンゴーってことを伝えるよ。
俺から、が重要だ。

カララギマンゴーの友はきつと重要ポジのはず。

あとは、おまえらしくってことも伝えておけよチビ。
カララギマンゴーあれば伝わるから大丈夫だ。
おまえらしくカララギマンゴーを愛して食べるよってことだけど。

やっときt……誰？
誰だし。

背中が大きく開いたドレスを着たセイバーですね、ギルガメッシュと戦っててください
黒髪ってことはまさかの極 オルタ化ですか。
自分の世界へ帰れ！！

え、エヴァさんなに嬉しそうにニヤリってやってるんすか。
覚悟はできたかとか言ってるけど誰だし。

ハム先輩もそれでこそ私の後輩だ！！みたいなノリノリである。
あるえー？
なにこの展開。

ゲイヴンのオッサンも……わかってたさ。
そういう反応するのは。
何が、いい顔してるだし。

誰だよ、これ。
何を呆けている？だつて……？
おま、これレッドさん。
なにどうしたの。
女装？
でも胸ちよつとだけあるし。
女体化したの？
まさかのTS？
けんぷふぁー？

答えを……得たぞ、ピクシー!!

今のレッドは女ではないと思いつく。

いつも通りいけば完璧

そして今はとりあえず凌いで後で悩むべき

かんつべき。

これでゴリ押しする。

すまん、少し驚いていた

訳：初めて見たからビビっておどろいたからマジ勘弁してよね
おめえら皆、この世界の人間が美形過ぎんのがいけねんだよ
テンパって言葉でねえ、どうすんべ

遅かったな……言葉は不要か……

めっちゃ必要です。

特に今の俺には、たくさんの言葉が必要。

説明を要求したい。

だが、今の俺は脳が沸騰しかけるほどにいっぱいいっぱいなのだ。
もうこれで凌ぐ。

完璧だ。

あとはお馴染みの合図。

軽く拳を打ち付ける。

こっつって。
じゃあ、行くか。

え、なに？

いつか俺を超えるからっだって？

帽子は置いてきたと言われてもわかんねえけど、とりあえずコイツはあのレッドなんだと思う。

それまで待っててやるよ

ってニヤリ笑いするのが俺の限界だった。
脳がやべえ。

カララギマンゴー食い過ぎた呪いかもしれん。

追憶

おい

な、なにかな

おまえ、汚え

……だつて川、冷たいし

ああ、そうか

そうかつておにーさん、どこいくの？

あっちのなんもねえとこで温泉掘るんだよ

オンセン、あるんですか？

知らん、勘だ だがある

勘つて……

俺が言つんだから間違いないえ

あ、待ってってば……

おまえ、名前は？

え、え？

名前は何つつんだって聞いてんだよ

えっと……おにーさんこそ、名前はなんですか！！

いや、質問に質問をだな

ナマエ、なんですか！！？

俺は無い

ナイさんですか、珍しいですね

そうじゃなくてだな、名前無しってことだ

……今まで、どうしてたんですか

……無くても大丈夫だったんだよ　んで、お前は？

……私もないです、無いってことにしました

いや、すんなよ……

私、自分の名前だいつきらいなんです あんな、名前…… だ
から、無いです

……好きにしろ、めんどくせえな

じゃあ、同じですねー

そこは、喜ぶところなのか？

でも、ないと不便ですね

……いつもは名前で呼ばれてたんじゃなかったのかよ

どうせ、あれ、とかおい、とか呼ばれるだけでしたし 名前な
んで、気にするのも久しぶりです

……そうか

おにーさんに、私がつけてあげましょう!!

いらん

いいから、いいから 一生懸命、考え…… ナナシとか、どうで
す？

安直だな、おい

あんちよく？

あー、てきとーってことだ

頑張っつて、考えた魂の、名前になんて失礼な!!

ダイゴウジガイかよ……

さあ、おにーさんの番です

あ？

私に名前、ください

えー？

ほら、ほらほら

メイでいいや、決定

なんて、すぐ……意味は？

名無しの名はメイって読めるから

ナナシの、ナはメイ…… ま、まあ良しと、しておきます

なんで偉そうなんだよ……

ほ、ほら 入るんでしょ この、お湯に!!

氷入れたけど暑かったら言えよ

は、はい……!!

……

……

何泣いてんだよ

な、泣いて、ないです!!

……

……

……メイ

じゅっ……

ちっぴ無いてんじゃん

泣いて、ないですっ!!

おれとレッド（後書き）

なんでアテイ先生ってヒロインじゃないんだろっ。

あんなにエロ可愛いのに女主人公だから攻略不可。

俺は泣いた。

泣きながらアテイ先生ぺろぺろしてた。

そしてクノンやアルディラが俺を正気に戻した。

今では私が、みんなにぺろぺろしてもらう番です。

さあ、ぺろぺろしなさい！！

さあ、さあさあさあさあさあさあさあさあ

更新が滞るかもしれません。

下痢してる人のトイレを待つ寛容さでお待ちください。

あ、小は使っても大丈夫ですよー

コルトと悪魔(仮)(前書き)

とりあえず(仮)としています

ちびちび書いてたのを更新してみました

変更するかもしれませんが

コルトと悪魔（仮）

平均よりも背の小さな、そしてこのことを誰よりも気にしている張本人である少女はイライラしていた。

少女の名前はコルティア、親しい人物はコルトと呼んでいた。母譲りのサラサラと流れるような柔らかい茶髪が自慢だった。

天真爛漫を絵に描いたような彼女であったが、イライラの原因がすぐそばにあることで普段とはかけ離れた心理状態だった。

灰色に近い雑草のようにパサついた白い髪の毛。

元から白ではなくまるで黒かったモノが色落ちしてくすんだような濁った白。

灰を被っているような印象を受けるほどだった。

普段は顔や髪を隠しているトレードマークといっても差し支えない大きな黒いバンダナは右の二の腕に巻かれていた。

人を殺せそうな、というか殺すのを気を付けているような鋭い視線。まるでこちらの考えをすべて読んでいるかのように錯覚する黒い瞳。

そこにいるだけで空気が重くなるほどの重圧を感じる存在感。

莫大な勇気を振り絞って目を合わせた者に恐怖と絶望を味あわせるために用意されている額を引き裂かれたような大きな傷跡。

読み取ったかのように心を鷲掴みにし、頭に直接語りかけてくるような声を発する口。

その強大な雰囲気とは引き換えに、奇妙なアンバランスさを感じさせる普通の体躯。

普段着ている、色褪せてボロボロになっている服（リオや先輩が作業服と呼んでいた）とは違う、悪魔を彷彿とさせる真っ黒な正装。

彼女の嫌いな悪魔がそばにいたのだが普段通りならば、まだ我慢できた。

そいつがバンダナを外していること、ただそれだけの事だが彼女にとっては重要なことで、そんなことが抑えていた怒りが限界に達しようとしていた。

必死に体の内側から溢れそうになるその感情を抑えるように無言で耐えていた。

視界に入れないように、そして考えないように。

ここまで必死になるほどその悪魔が初めから嫌いだったかといえ、そんなことは無かった。

ただ、トラウマを餌に悪感情が育った。

それだけだった。

憧れのレディア先輩の助手を務められることになり、夢見心地といつても過言では無い日々を過ごした。

親友のリオがバンダナの悪魔の助手となり、時たま手紙を交わすだけになっていたのが彼女の持つ唯一の心配だった。

大丈夫なのだろうか、リオを思い出すたびにその考えは抱くがどうすることもできなかった。

憧れの先輩に相談しようとも、彼なら大丈夫だからと言われ続けな

んとか納得していた。

公式戦で出会ったりリオの様子はどこも可笑しくなかったが、悪魔に信頼を向けているのは一目でわかった。

例えば在学中からリオはあの悪魔に傾倒していた節があったのだが、彼女が長い時間をかけて仲良くなった親友と短時間で信頼を築いていたことによる嫉妬だったのかもしれないが、彼女は段々と不満を露わにするようになっていた。

リオがなんとか助手を辞めても大丈夫なように掛け合ってもらえな
いか、と先輩に相談したが怒られるだけだった。

より悪魔を嫌いになったのはその時だったし、嫌悪の気持ち 가속
し出すのもその頃だった。

バンダナの悪魔。

それは彼女が入学したときから耳にしていた言葉である。

友好的で明るい彼女は自然と友人が多くなり、またそうなるように
努力もしていた。

そして、増えた友人たちからその悪魔の噂を聞く回数が多くなつて
いた。

耳馴染みになるのもそう時間を置くことはなかった。

何度も聞いていれば親近感が湧く。

それが噂に聞く悪魔に対してだったので好意といったものは無かつ
たが興味はあった。

校舎の何処を破壊した、また謹慎になった、睨むだけでドラゴンが

ひれ伏した、空を飛んでいた、炎を吐く、空を凍らせた、人を引き裂いて血を飲んでいたなど。

どれもこれも眉唾モノで信じることはなかった。

所詮は噂であつたし、性格もあつてか悪感情を抱くはずが無かつた。本人と出会い、話すまでのことだつたが。

コルトはモンスターが好きだつた。

大好きである、と薄い胸を張って公言するほどだつた。

親友の制止を振り切つて朝まで語つていたくらい大好きだ。

なぜかと問われれば心辺りはいくつも思いつくくらい好きになる理由に溢れていた。

父がブリーダーだつた事も一因だつたのだろう。

彼女の気持ちが見える空のように曇つていったのは実技の授業が座学に変更したのを聞いたからだつた。

モンスターに触れ合うことの出来る実技を心待ちにしている彼女にとつて、どうしても納得のいかないことであつた。

我慢できずに担当の赤い髪が目立つレックス先生に抗議するも、口を濁すばかりだつた。

ただ、伝え聞いた話ではあの悪魔が何かをやらかしたらしい。

不満は募るばかりで、内心で悪魔を呪つておいた。

中庭のベンチに腰かけて空を眺める。

お昼になつても気持ちは晴れなかつた。

なんとなく、

それどころか雨が降りそうなほどに真つ黒い雨雲が、しどろしどろと雷

を鳴らしていることすら不快に思えた。
空が一瞬白んで見えたので、雷が落ちたのだろうか。
音の大きさや光からどうやらかなり近かったらしい。
屋内に避難しなければと立ち上がる。
どうせなら悪魔に当たればいいのに、と毒づきながらも頭の片隅で
なぜこんなに引き摺っているのだろうかとも考えていた。

破砕音が聞こえた。

音は徐々に近づき、そして目の前の校舎の一部が砕けた。
悲鳴や叫び声といった騒音が遠くに感じた。

校舎の瓦礫の真ん中には青年が立っていた。
視線はこちらには向いていなかった。
額から顔まで真っ赤に染まり、その赤は流れるように滴っていた。
ギラついているその眼光はまるで昔見た育成に悪モンのようで、一
目でコルトの背筋を凍らせた。

滴っている赤い液体　血液　に塗れたその顔は同じ人間とは思
えなかった。

直視するに堪えない別のナニカ。
これがあの悪魔だろうと確信した。

思わず目を逸らすと悪魔は純正のドラゴンを背負い、腕には金髪の
女性を抱えていた。
意識が無いのだろうか、目は閉ざされたままであった。

噂で確実に耳にすることになっていったバンドナは女性に巻かれていた。

不思議なことだが今の今まで気付かなかった。

悪魔の存在感に充てられていたのだろうか。

「なっ……」

悪魔はまるで何も見えていないかのように通り過ぎようとしたが、道を閉ざすように彼女が立ち塞がったのは半ば無意識での事だった。授業中止の鬱憤も相まっていたのだろう。

噂だと聞き流していた悪評が頭を駆け巡り、鬱憤と正義感とが合わさって彼女の足を動かしていた。

「何をするつもりですか」

一応、先輩だと聞いていたので丁寧語で対応したのは理性が抑えていたからだろうか。

無意識に言葉に棘を含めていた。

悪魔は立ち止まり、血を意に介さないかのようにゆっくりとこちらを、見た。

校舎から聞こえていた悲鳴が消えた、そんな気がするほどの静寂に包まれた。

即座に視線を下にずらしたのはほとんど反射のようなものだった。

本能が警鐘を鳴らしたから勝手に下がったに他ならない。

見てはいけないものだと、知らせてくる。

怖い。

その感情を抱くのと、ひゅっという音とともに肺から息が抜けるのは同時だった。

ぱくぱくと口を動かすが上手く息を吸うことが出来なかった。
頭の中が真っ白だった。

気温が一気に下がったような寒気で肌が小刻みに震えだした。
呼吸が儘ならない。

小さい頃に一人で眠るのがなぜか怖かった。
何も見えない暗闇にすることが我慢できなかった。
そんな恐怖を思い出させるような。
それでいて、そんなものは生易しいのだと嘲笑っているようだった。

「……………退け」

極度の吐き気。

自分が立っているのか、それともへたり込んでいるのかわからなかった。

顔は多分……………いや、間違いなく青ざめているだろう。
呼吸が不規則ではがはと自分で出しているのか疑うような音を発しながらなんとか空気を取り込む。

たった一言でこの様だった。
悪意に充ちている呪いの言葉そのものだったように感じた。

「……い、……あ」

私の質問に答えろと発したかったがそれも叶わなかった。限界だった。

意地で立っているだけでは耐えられなかった。

「……この程度なんだろうよ」

意識が途切れる中で聞いた言葉は嘲りのように感じた。
気負いなく歩く悪魔と背を見つめるだけの自分。
悪魔との出会いは途轍もなく苦かった。

その日から彼女はバンダナの悪魔が嫌いになった。
自分を否定されたように感じたその出来事が彼女のトラウマとして残っている。
気付かないほどひっそりと、少しずつ恐怖によるストレスが蓄積していた。

「ポワゾンがまだ来ていないようだな」

あいつの声が聞こえた。

憎悪が燻る。

抑えていたために臆気になっていた意識がはつきりしていく。

不意に会ってしまった目。

すべてに興味が無さそうな、表情。

先輩を慕っていたから。

悪魔を嫌っていたから。

崇拜に近い感情を持つ先輩の家名を聞いたから。
嫌悪する悪魔の顔を見てしまったから。

そんな理由が引き金となって、彼女の気持ちが出た。

「貴方はなんなんですか!!」

あの時と比べれば兎戯としか呼べない軽い威圧感。
悪魔は聞こえていないかのように虚空に視線を向けている。

「突然現れて失望したなんて言っただけ!!」

いきなり空から降りてきて、好きなだけ言っただけ帰って。
憧れの先輩がこんなやつという言葉で落ち込む姿を見て。

「期待しないなんて言っただけ!!」

慰めようとしてもコイツが正しいって自分を責めて。
何もできない無力感を味わって、先輩の信頼を見せつけられて。

「貴方がいたから、貴方のせいで……貴方に先輩の何がわかるって、
言っただけ……」

先輩の苦しみも知らないこいつが酷く憎くて。
それでも睨みつけることしかできない自分が不甲斐無くて。

先輩にどうしても謝って欲しい。

その言葉がどうしても出てこなくて。
睨み返されるだけで泣き出す自分の弱さが悔しくて。
流れる涙が鬱陶しく感じた。

「これを渡せ」

無様に泣いている姿を見つめながら悪魔が差し出したのはカララギマンゴーだった。

「あなたは、どれだけ私を馬鹿にすれば…… そんなもので先輩の気が晴れるとも思っているんですか?!?!?」

カララギマンゴーが自分を虚仮にしているように感じて頭に血が昇った。

自分でも八つ当たりだってわかっているけど、止め処なく流れる気持ちに歯止めが効かなかった。

「なら、十分だろうよ」

「何が十分なんですか、こんなもので!?!」

「いいから早く行け、あいつの好物だ」

普段の無表情と違い、ときどき嬉しそうにカララギマンゴーを齧る先輩を思い出して頭が冷える。
だから、どうしたのだという思いもある。

「だから、なんなんですか」

「いいから行け 俺からだってことも告げるよ」

だが、謝る必要はないのだと。

心のどこかでこの人は先輩を信頼しているのだろうと理解して。
先輩のことを何でも知っていることを羨ましく思ってた。

「おまえらしくって言ってやれよ」

何も言い返さずに持っていくのは先輩のためだと自分に言い聞かせて。
て。

振り返って持っていていこうと歩き出して。

昔よりも悪魔に慣れたのだろうかと思いつつながら。

「早く行け、チビ」

やっぱり悪魔は嫌いだ。
大嫌いだ。

コルトと悪魔(仮) (後書き)

やる気が死んでいます

次話も半分くらい書いてますけどこれが変更されたら書き直しっわ
あー^^q^^

更新が凍結する可能性があります

少し早い五月病ってやつです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7524r/>

いくせい、もんすたー

2011年4月25日10時24分発行